

同人誌 (2016年10月版)  
第24号~27号・合併号

# 風 狂

風 狂 の 会



詩

久賀島キリシタン	出雲 筑三	(2016年10月登録)
愛を知る人へ	高村 昌憲	(2016年10月登録)
ウサギとカメ	原 詩夏至	(2016年10月登録)
二ヶ国を同時に旅する子供達（修学旅行を引率して）	金 得永	(2016年10月登録)
御岳溪谷	高 裕香	(2016年10月登録)
バレリーナ	なべくら ますみ	(2016年10月登録)
夏	高 裕香	(2016年9月登録)
命日	出雲 筑三	(2016年9月登録)
海と語ろう	金 得永	(2016年9月登録)
楽観を勧める人へ	高村 昌憲	(2016年9月登録)
哲学の子	なべくら ますみ	(2016年9月登録)
浦島	原 詩夏至	(2016年9月登録)
チロ	原 詩夏至	(2016年8月登録)
いい人	なべくら ますみ	(2016年8月登録)
幸せを知る人へ	高村 昌憲	(2016年8月登録)
女郎グモ	出雲 筑三	(2016年8月登録)
神の島、神津島	金 得永	(2016年8月登録)
鴨川シーワールドのシャチ	高 裕香	(2016年8月登録)
目と目が	なべくら ますみ	(2016年7月登録)
犬	原 詩夏至	(2016年7月登録)
山の向こう	出雲 筑三	(2016年7月登録)
鴨川の家	高 裕香	(2016年7月登録)
おたあジュリアを讃えて	金 得永	(2016年7月登録)
遙かな人へ	高村 昌憲	(2016年7月登録)

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（十一）	三浦 逸雄	(2016年7～10月登録)
-------------	-------	----------------

評論

世の中（三）	北岡 善寿	(2016年7月登録)
世の中（四）	北岡 善寿	(2016年8月登録)
骨の行方	北岡 善寿	(2016年9月登録)
雑誌の座談会から（一）	北岡 善寿	(2016年10月登録)
小島政二郎『小説芥川龍之介』ほか（一）	神宮 清志	(2016年7月登録)

小島政二郎『小説芥川龍之介』ほか（二）	神宮 清志	（2016年8月登録）
詩人・作詞家・西條八十（一）	神宮 清志	（2016年9月登録）
詩人・作詞家・西條八十（二）	神宮 清志	（2016年10月登録）

執筆者のプロフィール

読者からのコメント （2016年9月現在）

## 十二畳の物置小屋

この空間に信者二百人を圧殺すべく押し込めた役人  
おしくら饅頭は骨だけでなく肺や臓器までひびが入った

今日も小屋から老若男女を問わず引きだされ  
数分後に耳をつんざく忌まわしい絶叫  
深夜まで続くうめき声は島をさらに静かにした

小屋に放り込まれるのは 一日一本の芋  
僅かな恵みを脂と汗と血みどろの若者にわたす  
お前だけは生きよ と手を握りしめた

糞尿なのか腐乱臭なのか もうどうでも良かった  
あの剛力の信吉さんは立ったまま絶命とは羨ましい  
生きることはこんなにも苦痛

筋肉は萎え水気と視力を失いながら延々八カ月  
信じたものを捨てるのは死よりも辛い  
小屋の人々はいつの間にか遅しくなってゆく

奇跡的に生き抜いた信者七九%がいま解放される  
若者よ生きて戦え、そして爺にかわり  
自由に体が動かせることの素晴らしさを伝えて欲しい

※ 明治六年長崎県五島列島久賀島(ひさかしま)・牢屋の窄事件は海外からの抗議により終結

恋愛による愛は相手を騙す  
自分も錯覚に陥り易くなり  
嘘が嘘を生むような愛です  
所在地が分からない愛の霧

歳を取った夫婦の真実の愛は  
やがて友情の様になると言う  
恋愛から友情に発展する愛は  
男と女から人と人の絆が舞う

何も捏造しないことが愛と知る  
存在そのものだけを望むことだ  
何も要求しないことが愛と知る  
存在を望み不在を望まぬことだ

計算された合理的な愛の中には  
理解すべきものは何も無いと言う  
真実の感情を思考するあなたは  
愛と理性の混合は腐敗すると言う

自らの過去を考えると高齢が有難い  
それでもその時代は真剣だったから  
騙しても不実でも真実に変わらない  
何故なら愛には沢山の愛があるから

あの日  
ウサギは魘されていた  
おかしい！  
どうしても追いつけない  
あの「ドジでノロマなカメ」に！  
どうしてだ？

俺は  
ここまで  
順調だったはずだ  
快速で  
飛ばして来たはずだ  
あいつは  
遥かに後方のはずだ  
そのあいつが  
どうして前にいる？

そんな馬鹿な、と  
俺は飛ばした  
ますますすっ飛ばした  
だが 追いつけない  
聞けば  
ギリシアの英雄アキレスも  
あと一歩  
あと半歩のところで  
あいつには  
遂に 追いつけなかったとか  
俺は  
ひょっとして  
どえらい「バケモノ」を  
敵に回してしまったんだろうか？

そ、そんな筈はない！  
ウサギは叫んだ

これは夢だ！  
そうとも！ 悪い夢だ！  
だとすれば  
すぐさま 起きなければ！

だが それにしても  
俺は 一体  
いつ 寝てしまったんだ？  
ガチな現実から  
夢の世界へ  
いつ 迷い込んだんだ  
あの アリスみたいに？

何故だ？  
分からん  
俺は ひたすら  
明るい陽の射す  
ゴールへの道を  
走って 走って  
わき目もふらずに  
走り抜いていただけなのに！

いや それとも  
俺は どこかで  
既に とっくに  
気づいていたのか  
これは変だ と？

道の終わりに  
ゴールが待っている  
直線コースの  
一本道など  
それだけで  
もう 変じゃないかと？

なのに  
それでも  
駆け続けるのか？

俺は？  
タフでクールな  
リアリストの  
この俺は？  
或る時 突然  
ドジでノロマな  
ロマンチストの  
カメが 優しく  
こう 揺り起こすまで？

「馬鹿だな 君こそ  
夢を見ながら  
今まで むざむざ  
生きる時間を  
棒に振り続けて来たんだぜ？  
さあ レースは終わったよ  
日暮れだ もう帰ろう？」

いやだ！  
夢などいやだ！  
俺はリアリストだ！  
タフでクールなリアリストなんだ！  
出してくれ！  
出して 今すぐ  
ドジでノロマな  
カメにこそふさわしい  
夢のレースから  
タフでクールな  
リアルなレースに  
俺を戻してくれ！  
お願いだ！

眠るウサギの  
耳が暴れる  
鼻がうごめく  
全身がひくつく  
道端で――。



その眼裏を  
更に  
緑の  
ライヴァルの背中が  
まあるく  
遠ざかる  
ゆらゆらと.....。

韓国から来た子は海外修学旅行  
日本で生まれた子は国内修学旅行  
同時に韓日両国を旅する子供たち

去年は沖縄  
今年が広島平和公園  
戦争と平和を黙々と学んで  
日本の自然と歴史を探訪する  
東北アジア ルネサンス時代の未来の主演

去年は新緑の季節に  
自身の春を学び  
今年が取入れの季節に  
自身と世界の秋を省みる  
頼もしくも美しい子供たち

日本の中で世界を学ぶ子供たち  
旅の思い出が種子となり  
風に乗る歳月が過ぎて  
自身と世界を越えて世に益する  
真実なる実を結ぶべき大韓の宝

\*本作品の日本語への翻訳は金一男氏による。

故郷 遠く 恋しく  
古里に似た山里を  
独り 探し歩く

谷間の風情は太古からか  
清い流れは天空の恵みか  
遊歩道歩けば 足取り軽やか

川の流れは岩も砕くが  
岩にぶつかってはしぶきを上げ  
また、流れになって大海原に向かう

異国の女は素足になって  
川に足を 浸し  
空遠く 光見つめて 我にかえる

オーケストラの音と共に

舞い上がり

舞い降りる

娘たち

軽やかに

波のような曲線を作り

また 次々と舞い上がる

箸のように細い体の

やわらかな動き

呼吸を合わせて

どうしても呼吸の合わない

一人

二分の一拍でもない

瞬間的な微妙なずれ

群舞を乱すほどではないが

気になる動き

ラインを作って踊る娘たちは

また次々と舞い上がり 舞い降りる

踊り子たちの扁平な胸は

軽やかさを助ける

いくらかの豊かさを持った

バレリーナ

跳躍の度

揺れるほどでもないけど

気にもならない箸の遅れが

気になってしまった

今日のバレエ鑑賞





確かに梅雨開け宣言だ。

前ぶれもなく ジジジジジィー

いっせいに蝉が鳴き出す。

昨日までは、鳥達の鳴き比べがにぎやかだったのに

さえずりでなく……

巣作りというか、子育てというか、

我が家は深大寺の森の近く

蝉の声は都会人のように慌ただしい

ジジジジジィー ジジジジジィー 朝も夜もない

そんな暑い夏に終止符を打つかのように

ひとすじの稲妻がドーン ピカー

叩きつけるような音と切りつけるような豪雨。

ひと夏の別れは、優しい景色がいい。

私は「さようなら」は言わない。

あわてんぼうのトンボが飛んで来ているのに……

まあターさん、今日はえらくご機嫌ね  
そりゃそうだよ  
あいにく雨降りだが けじめの日なんだよ

お連れさんは大人しいわね  
いやいやこれで結構頑固者でね  
彼は結局正しいんだ

あれターさん、なに泣いてんの  
馬鹿いえ うれし涙だよ  
笑顔で社員一人ひとりと握手し給料を手渡したんだ

今宵は二人だけの晩さん会  
もっと前に逢っていればさぞ愉しかっただろうな  
次に会う時があったら託していいね

ターさん、また来てね  
いつになくママは鄭重に頭をさげた  
川は増水したにも拘わらず沈々と流れていく

恋しかった海が  
絵のように迫ってくる  
海と語ろう

世界が目覚める前の  
千年の物語  
波に乗って伝わってくるよ  
海と太陽の歌  
風に乗って  
こだまする

海と語ろう  
自然が目覚める前に  
恋しさを  
いのちを  
平和を

海と語ろう  
けがれなき姿で  
色なき色で  
声なき声で  
魂の歌を

\* 本作品の日本語への翻訳は金一男氏による。



中学校までは地域とか親の関係で  
予め入学する学校が決まっていた  
高校はクラス担任の教諭の勧めで  
学力に見合った進学校に入学した

大学へ入学したのは自分で決めた  
風向きが変わると心細い空中の凧  
やはり自分で決めると糸が切れた  
目的地を考えようとはしない自己

それでも地図を探さないでいたから  
次第に感受性ばかりを頼って行って  
受け身の生活だけで生きていたから  
独りでは手に負えなかった生活の糧

悲観主義は気分のもつとあなたは言う  
教訓と鑑賞の生活は気分だらけだった  
楽観主義は意志のもつとあなたは言う  
時間を定めて行動すると意志が蘇った

進んで時間を決めて行動すれば良い  
人間の意志に与えられている才能だ  
事故も病気も不幸も考えたりしない  
七色を照らす楽観は意志にあるのだ

かなり急な坂道 距離も結構長い  
その途中にあった神社  
鳥居が立ち 注連縄が張られて  
たまには前の通りから  
柏手を打ち 拝礼する人の姿を見かけることも

その境内にいた子 年齢は分からない  
少年のような 青年のような  
学校には行っていないようだ  
背は高く細い身体  
着ているものはいつも さっぱりと清潔

両手を挙げ 骨ばった指を開く その合間から透かし見る空  
黙ってうれしそうに笑って  
朝の駅へと急ぐ人も  
坂を下り 学校へと向かう子供たちも  
玄関先の通りを掃く人も  
彼を 哲学の子 と呼び見守る  
時には 微笑みながら  
お早う と声を掛け通り過ぎる人もいるが  
彼からの返事はない

夏の朝には  
ランニングシャツ姿の細い腕に  
プツプツ と汗を湧き立たせながら  
かざした指の間を通し 顔をゆるめ 太陽を見つめていた  
寒い朝も 指を開き  
空を仰ぐ  
素足のまま サンダルを突っかけて  
誰を気にすることもなく

誰が見とがめることもない

数十年ぶりに

通りかかった神社前

鳥居はあのままだに立っている

祭事があったのか新しい注連縄

あの子の姿はない

通る人もいない静けさ

浦島は もう死んでいたのだ  
本当は もう死んでいたのだ  
本当は 乙姫は龍だし  
龍宮に 到着して早々  
浦島は クスリで眠らされて  
頭から 食われてしまったのだ  
カメは 最初からそのつもりで  
龍宮に 浦島を拉致したのだ  
カメを 苛めていた子供たちは  
本当は ヤラセのサクラなのだ  
浦島が 釣った魚の子供たちが  
本当は ヒトに化けていたのだ  
復讐のため？  
生活のため？  
娯楽のため？  
分からない  
分からないが  
恐らくは  
その全部だったんだろう

浦島は もう死んでしまった  
なのに 浦島の「夢」は 生き残った  
親切が いつか報われるという「夢」  
楽園が どこかにあるという「夢」  
タイや ヒラメの舞い踊る「夢」  
平凡な 馬鹿な男の見る「夢」  
馬鹿な 水泡の歓楽の「夢」

浦島は 馬鹿な男だから  
三百年 自分の死を知らなかった  
三百年 馬鹿な「夢」を見続けて  
三百年 海底に沈んでいた  
死体は とうに白骨と化しても  
妄執の 酒池肉林の「夢」に  
三百年 成仏できなかつた



なのに 或る時 浦島は気づいた  
全てが あまりに容易すぎることに  
全てが あまりに楽しすぎることに  
人生が もし これだけのものなら  
所詮は そんなもの「夢」と同じだ  
何百年 続けても無意味なのだ

浦島は 「生きたい！」と思った  
地上で 地に足をつけ生きたい！  
故郷の あの 貧しい漁師町で！  
浦島は 乙姫に訴えた  
沢山だ もうこんな生活！  
復活だ 俺は生まれ変わるのだ！  
水泡の 浮草の日々から  
いっそ もう足を洗いたいのだ！

乙姫は 艶然と笑った  
浦島に 心で呼びかけた  
あのね 浦島さん 洗おうにも  
私たち 足なんかないのよ  
だって 私は 最初から龍だし  
貴方は もう とっくに幽霊だし  
だけど 私も 最後くらいは  
貴方に 見せなくちゃね せめてもの真心を  
念の為 後腐れがないように……

乙姫は 玉手箱を渡した  
浦島は 勇躍 帰郷した  
そして 忽ち 「真実」に気づいた  
故郷は もはや異郷に過ぎないこと  
しかも 龍宮には もう戻れぬこと  
自分に 居場所など もうないこと  
そして ただ一つ 残った 玉手箱

そこに 最後に匿われた「追憶」  
それは 誰にも奪えない筈だった  
浦島は とうとう 玉手箱を開けた

けれど 中には「追憶」などではなく  
最後の 究極の「真実」が詰まっていた  
浦島が もう とっくの昔に  
死んで この世にないという「真実」が.....

白煙が 渚の風に 消えたとき  
白髪の 浦島など いなかった  
浦島は どこにも いなかった  
白煙が つまりは 浦島だった  
浦島の 死ねない 「夢」が今  
ついに 成仏して 消えたのだ

消えた 白煙  
白煙が 消えたこと  
消えた 浦島  
浦島が 消えたこと

それが 浦島の  
最後の 救いだった.....

冬の渚で

リードを解き放つと

チロは

もうその瞬間

俺なんかの

とうてい追いつけない

彼方の

水際を

走っていて――

おーい、チロ

おーい、チロ

俺の

狼狽まじりの

淋しさまじりの

制止など

烈しい浜風に

どこ吹く風と

飛ばされてしまって――

仕方がないので

俺は

流木に

腰掛けて

暫く

流木に同化する

いいとも、チロ

おまえに

おまえの

浜風になる自由があるなら

俺にも

俺の

海を 来し方を

ぼんやり懐かしむ自由があるのだ――

その彼方に  
本当に  
ここ以外の  
真の故郷があるのか  
どうなのか  
その種の問いかけは  
ひとまず  
措くとして。

チロよ  
わが犬  
わが友  
とはいえ 今  
あらゆる  
おためごかしを振り捨てて言うなら  
次の瞬間  
俺には  
おまえを  
再びリードに繋いで家に帰るか  
おまえを  
渚に残して自分も旅立つか  
この  
二つの選択肢しかないわけで――

そんな時  
この 淋しがり屋で  
エゴイストの俺が  
どっちの道を  
選びかねないかは  
おまえも  
うすうす感づいているよね？

だから、チロ  
今はもう暫く  
こうしていようよ  
ほら  
遠くを船がゆく

あれは  
リードを解かれた  
おまえか？  
リードを解いて旅立つ  
俺自身か？  
それとも  
そんなおまえと  
そんな俺との  
この世の  
どこにもない  
影なのか？

彼はいい人

仕事は好き

いつも元気

友人たちが好き

友人たちも彼が好き

結婚は三回目

別れた理由が何だったのか

周囲の誰もが知っている

でも彼はいい人 何も気にしていない

今日も好きな仕事

に 打ち込んできた

夜勤明けの早朝

ドアを開ける

まだ少し 暗さの残っている部屋に

開けた空間の

思いがけない大きさ

お帰りの声も

昨日までの匂いもない

ああ またか

背負っていた荷物を下し

むき出しの床にごろりと

寝転んだ

夜勤の疲れから抜け出し

知った あの時の暖かさ

目覚めが遅かったのかもしれない

もう一度 目をつぶって

見る

すべてが取り払われてしまった部屋を

自分の心に嘘をつくような毎日  
心からやりたいことが出来ずに  
肯定よりも否定ばかりだった命  
やがて大きくなって行った青鬼

妻と一緒にあなたを訪ねた時に  
等身大のあなたの彫像は大きく  
六月の異国の空が見える窓辺に  
一世紀前の新聞記事が目につく

近づくと書き直しの無い即興を  
毎日書いていたあなたの随想だ  
やがて誰も気がつかない言葉を  
惜しげも無く届けた夢の花束だ

旅行や金持ちや成功や楽しみで  
幸せになれるのではないと言う  
苺には苺の味があるのと同じで  
人生にも幸せの味があると言う

命と共にあることで肯定できる  
そんな思いでフォーレを聴くと  
今もあなたと共にいる気がする  
聴くのは青鬼が逃げて行く足音



女郎グモは綺麗好きだった  
ワナは整然として美しかった  
風が吹くとリズム感よくゆれて光かがやいた

奴は暴れなかった  
冷静にこのワナの弱点を観察している  
段々とじっとしている奴に苛々してきた

絶体絶命のなか平然としている奴は一体何者か  
むしろ笑っている風にさえ感じた  
暫くしてワナが風もないのに揺れだした

そろり近づくとなんと奴は視線を送ってきた  
今なら許してやる といわんばかり  
思いがけずカツとなり触手をのばした

一瞬のことだった  
奴のいなくなったワナの手入れをする  
女郎グモは更に美しくなって じっくりと待つ

太平洋に浮かぶ神津島  
十二時間ぶりに着いたジュリア巡礼  
島人になったようにうれしい  
客を迎えてよろこぶ島人たち

いくつかの島をかかえて生きる人間の心  
海に来れば名も知らぬ島に出会う  
心の海が大海原を見てときめく

遠い海に出てみれば  
心の島が流れ星となって  
我知らず別の故郷をみつけ  
流れ星の島は海となって流れる

窓の向こうで迎えてくれる神津島の海  
海はまさに母の心  
ジュリアの心

ジュリアは歳月に乗って神となり大海原となり  
星となってわれらを迎える  
ジュリアは雲となり風となって囁きながら  
海の波のように黙々と生きよと言う

\* 本作品の日本語への翻訳は金 一男氏による。

こんにちは！

キミが世界的に有名なシャチ君ですか？

海のくじら牛？のようですね。

巨大な体を空に放して ザポーン

しぶきが観客席に ザポーン

子供も大人も ずぶぬれてザポーン

この巨大な体を空中回転は大変だ。

お姉さんに餌をたくさんもらっても、キスされても、

やっぱり、大きな海で仲間と暮らしたい。

今日も、お姉さんをのせて水槽を一回り

お姉さんだから、のせてあげるよ。

子供の声が聞こえる、聞こえる。ハイ・ポーズ！

一仕事終えてきたらしい消防自動車  
当然のこと 赤信号で止まっている  
ふ〜 っと ため息を吐き出すように  
エンジン音を静めて

同じ時 赤信号で止まった男の子  
光る赤い自動車と向き合うように  
手を伸ばせば 触れることの出来そうなほど  
近くにあった  
すご〜く うれしい 偶然

繋いでいた手を揺すり  
顔を見上げる  
頷きながら目を和らげる母親

目の端に視線を感じたのか  
横を向いた消防士が  
プツ と短くクラクション をさわる  
目元を和らげ 何気なくうなずきながら

顔中喜びのきらめき 声を上げそうな  
男の子の夢は決まった  
大きくなったら  
ぜったいに 消防自動車の運転手になる

信号が変わり  
後に繋がっていた車を引き連れて  
消防自動車が  
動き出した  
ゆっくりと



昔、轢かれた犬に出くわした。  
暗闇で、姿は見えないが  
ばたん、ばたん  
路面に身を打ちつけ  
ぎゃうん、ぎゃうんと  
最期の悲鳴をあげ――、

それが、次第に間遠になって  
遂に全く途絶えてしまった。  
ああ、死んだな……と  
俺は悟った。  
姿は、最後まで見なかった。

その頃は、まだ小学生だった。  
夜、警察で、  
剣道を習っていた。  
出くわしたのは、  
その帰りだった。  
竹刀に下げた防具袋が  
鎖骨に  
食い込んで  
痛かった。

死ぬとは、  
つまり、  
そういうことだった。  
そういうことだとは、  
はっきり判った。

だが、

そういうことは、  
どういうことなのか？  
それは、  
はっきりとは判らなかつた。

判らないまま、  
俺は帰宅した。  
判らないまま、  
防具袋を下ろした。

鎖骨の痛みは、  
すぐに治った。  
けれども、  
何かが、  
まだ残っていた。

何かが、  
まだ、  
耳奥に、  
心に、  
みっしり食い込んだままだった。

すべてこのよはみんしゅしゅぎの  
よのなかでありまして  
いまはせんきよのまっさいちゅう  
ええ……でありまして  
その……なんでありまして……しかし  
この……ということは  
でありますからして  
このことは  
ということでありまして  
ああ……ええ……  
そのわけは……

「えんぜつしているひとはだあれ  
ちっともきこえないじゃないの」  
ワイワイ ガヤガヤ  
ワイワイ ガヤガヤ

にじゅういつせいきのみらいは  
みんなみんなバライロでございまして  
きこえるようであります

〈画面転換〉 〈がめんてんかん〉  
すな こいし きてつ がんぺき  
ようこうろ えんとつ ひこうせん  
はりがね はぐるま てっぼう かくへいき  
谷底カラ天ヲ望メバ  
空ノ色ハ曇リ日ノ灰色ナリ

海辺の鷗よ羽がないではないか

くるくる回る脳天回路ヨリ



「せいぎのみかたはだあれ」 「いつもいつも  
ゆびおりかぞえているひとだあれ」

共同墓地は宇宙船に乗って  
遠い未来の星へ飛んで行きます  
何しろ地球は狭いものですから  
墓地など作る土地はありません  
火葬にしたら骨粉は人工衛星に乗せて  
謎の星になるまで宇宙の外へ飛ばすのです

きっと靈魂も一緒に行ってしまうのでしょう

〈三浦逸雄画伯の世界・『山の向こう』を拝見して献詩〉

山の向こうには何があるんだろう  
ここは息がつまって荷物が重い  
行きたい、出て行きたい

身体と身ぐるみを軽く  
心と頭のとっぺんも軽くして  
風のメロディーを聴きたい

すると山の方から霧もやが部屋に入りこみ  
背中に羽根が生えてきた  
試しに羽ばたきすると風が耳もとに吹いた

床には溜まった霧もやが波打っている  
それを吸ってみると妙にフルーティー  
頭蓋骨も少しずつ縮まってくるのが心地よい

ふと見ると部屋の荷物が何もかも消えている  
足元に眼を降ろし、再び見上げた眼に山がささやいた  
窓は開かれている

海開き前の鴨川の海は、うんと静まり返り  
聞こえてくるのは波の音だけ  
まるで、呼吸を整えているかのようだ

ザーー ザザザザザー ザーー ザザザザザー  
目を閉じ 海と一体となって  
海の息づかいに呼吸を合わせる

空を見上げると透けるような青色  
海の青は、底がないように深い  
全てを包み込み奥に沈めてくれそうだ

だが、抱きしめてはくれない。受け止めるだけ  
波の音に合わせて 心を空っぽにし  
果てしない空に飛ばそう。 思い切り。

六百年を生き続けるジュリア  
風に乗って歳月は行き  
国境を越えて愛になった

神津島は神の島  
身も心も美しいジュリア  
老いも若きも親しむ

ジュリアの心に海の神も  
歌となり踊りとなって  
島と大陸をはるかに巡る  
おたあジュリアは朝鮮の仙女

神津島は神の島  
断崖の上にナリの花より清きジュリア

\* 本作品の日本語への翻訳は金一男氏による。

\* 「おたあジュリア」は16世紀末、壬申の乱(文禄の役)で幼くして小西軍に捕らわれ、渡日後にクリスチャン大名小西行長の養女となって天主教に帰依するも、関ヶ原の合戦で小西家が滅びたのちは徳川家康の侍女となる。棄教して家康の側室となることを再三勧められるが、これを拒んで伊豆七島に流された。「ジュリア」は洗礼名、「おたあ」は養女となった時の日本名。彼女は、その無私の博愛により、行く先々で人々の愛と尊敬を得ていたという。

あなたは何時も笑顔で迎えた  
私が迷って混乱していた時も  
あなたは何時も言葉をくれた  
私にはあなたは穏やかな翳雲

何時あなたを知ったか忘れたが  
友も家族も他人も区別がつかず  
自らを見詰めるだけの青い自我  
夢中で見ていた山頂までの地図

他人が作った道ばかりを信じて  
権力者のように見ていただけだ  
登らずとも見ていた山頂の果て  
権力者のように空が大切なのだ

そんな時にあなたの言葉を聞く  
実力は権力ではないと断言する  
あなたの思考は何処までも続く  
私は全ての山頂から目を伏せる

すると本当の空と海が眼に映る  
私は歩き出すことが出来たのだ  
そして真の楽しみは実力にある  
私が向かうのは遙かな人の処だ



三浦逸雄「林」10号（油彩）





人には誰しも好みというものがある。それに従ってあれこれ批評するのは当り前のことで、その理由やら何やらが、外野席の観客のような私如き読者には面白いのだ。文学とは何かを考えさせるからであろう。芥川賞の歴史の中で、最も大きな反響というより波紋を広げたのは、遠藤周作受賞の翌年、第三十四回・昭和三十年下半期の受賞作「太陽の季節」であった。作者は後年政治家に転進した石原慎太郎である。世間はこの小説の出現に驚いた。驚いたばかりか、慎太郎刈というヘアスタイルが若者の間に大流行したのである。その小説は、平野謙のような批評家なら「純文学の変質」と評するに違いない。歴史的な変化を画するものであったと言ってよい。大変長くなるが、私がノートに写している選評を敢えて出しておこう。

石川達三 = 候補作品を五篇まで読んで、今回は当選なしという事になるかと思ったが、最後に「太陽の季節」を読み、推すならばこれだという気がした。この印象は委員諸氏の意見を聞いているうちに一層はっきりして来て、これを当選と決定してもよいと思った。

欠点は沢山ある。気負ったところ、稚さの剥き出しになったところなど、非難を受けなくてはなるまい。疑問の点も少くない。倫理性について「美的節度」について、問題は残っている。しかし如何にも新人らしい新人である。危険を感じながら、しかし私は推薦してもいいと思った。危険だからこそ新人と云えるのかも知れない。芥川賞は完成した作品に贈られるものではなくて、すぐれた素質をもつ新人に贈られるものだとは私は解釈している。この作者は今後いろいろな駄作を書くかも知れない。私はむしろ大胆に駄作を書くことをすすめたい。傑作を書こうとする意識はこの人の折角の面白い才能を萎縮させるかも知れない。

中村光夫 = (前略) 「太陽の季節」は未成品といえ一番ひどい未成品ですが、未完成がそのまま未知の生命力の激しさを感じさせる点で異彩を放っています。

若さからくるポオズが多い、というより若さとポオズそのもののような小説で、虚飾と誇張にみちていますが、その肩肘はった大袈裟な身ぶりに意識しない真摯さがあふれていて、この背徳小説の作者は彼自身が意識しているより、ずっときれいな心の持主なのです。甘ったれた青年の純情は、現代ではここまで行く。こういう体験を傷つかずに描くことは、事柄の性質上不可能な筈です。

常識から云えば、この文脈もところどころ怪しい。「丁度」を「調度」と書くような学生に芥川賞を与えることは、少なくとも考えものでしょう。

石原氏への受賞に賛成しながら、僕はなにかとりかえしのつかぬむごいことをしてしまったような、うしろめたさを一瞬感じました。しかしこういうむごさをそそるものがたしかにこの小説にはあります。おそらくそれが石原氏の才能でしょう。

佐藤春夫 = (前略) 僕は「太陽の季節」の反倫理的なのは必ずしも排撃はしないが、こういう風俗小説一般を文芸として最も低級なものとしている上、この作者の鋭敏げな時代感覚もジャーナリストや興業者の域を出ず、決して文学者のものではないと思ったし、またこの作品から作者の美的節度の欠如を見て最も嫌悪を禁じ得なかった。

これでもかこれでもかと厚かましく押しつけ説き立てる作者の態度を卑しいと思ったものである。そうして僕は芸術にあつては巧拙よりも作品の品格の高下を重大視している。

僕にとって何の取柄もない「太陽の季節」を人々が当選させるという多数決に対して、僕にはそれに反対する多くの理由があつてもこれを阻止する権限も能力もない。僕はまたしても小谷剛を世に送るのかとその経過を傍観しながらも、これに感心したとあつては恥しいから僕は選者でもこの当選には連帯責任は負わないと念を押し宣言して置いた。おかげで芥川賞は僕がいつも我田引水の横車を押すという誣言からは免れる。

宇野浩二 = (前略)「太陽の季節」は、これまであまり読んだことのない、新奇なような感じがしたので、読みつづけてゆくうちに、私の気もちは、しだいに、索然として来た。味気なくなつて来た。それは、この小説は、仮に新奇な作品としても、しいて意地わるく云えば、一種の下らぬ通俗小説であり、又、作者が、あたかも時代に(あるいはジャンリズム)に迎合するように、このごろ無闇に流行している「拳闘」を取り入れたり、ほしいままな「性」の遊戯を出来るだけ淫猥に露骨に、(そのほんの一例でも引用するに忍びないほど)書きあらわしたり、しているからである。しかし、結局、この小説は、面白おかしく読ませるところはあるけれど、唯それだけの事であつて、私をもっとも気になるのは、又、しいて穿つて云うと、案外に常識家ではないかと思われるこの作者が、読者を意識に入れて、わざと、あけすけに、なるべく、新奇な、猟奇的な、淫靡なことを、書き立てているのではないか、と思われることである。

—— 中略 ——

さて、こんども、(「こんども」である、)賞をきめるのに、係りの人が当惑する(思案がつきて途方に暮れる)ほど、銚衡委員たちの間に、もやもやした議論がおこつた。「太陽の季節」についてである。そのこの時の銚衡委員たちの議論についての私の記憶は極めてアヤフヤであるから、これから述べる事は、その記憶のアヤマリのために、これからその名を出す銚衡委員たちに大へん御迷惑をかける可能性が多いと思うから、その事も前もってお断りしておいて、いざ、その時の事を、おぼろげな記憶をたどつて、書いてみよう。「太陽の季節」の授賞を、終始積極的に主張したのは、船橋聖一と石川達三の二人であり、たしかにシブシブ支持したのは、それぞれ強弱はあるが、瀧井孝作、川端康成、中村光夫、井上靖の四人であり、それに不賛成をととなえたのは、佐藤春夫、丹羽文雄、宇野浩二の、三人である。

さて、いよいよ何としても「授賞」を決定せねばおらぬ、という事になった時、たしか、係りの人が、授賞を主張したのが二人、それを支持したのが四人、一と、都合、「六人」となるから、俗に言えば、「多数決」だ、ということによって、「太陽の季節」ときまつた次第である。

ところが、こんどの銚衡委員会で、誰が云つたのか、「シブシブ」という言葉が出た時、私はふと、第何回目かの銚衡委員会の席上で、やはり、誰かが、「目をつぶる」(つまり、「欠点を見ぬふりをして咎めない」と云つたことを思い出した。—「シブシブ」「目をツブル」、—私は、この銚衡委員会で、しばしば、この「シブシブ」と「目をツブル」を経験したので、その事をアリノママに書いたために、あちこちで大へん憎まれたが、そんな事より、「シブシブ」(つまり「いやいやながら」)の思いをしたり、「目をツブル」ことを余儀なくされたり、する方が、よっぽど辛い思いをするのである。

このような銚衡の経過を見ていると、宇野浩二流に意地悪く言えば、牛や馬の品評会に似ていないではない。銚衡委員は目の肥えた伯楽である。品評会は商取引の場であって、売りに出されているものに値をつけるのが役目だ。どんなものにだって良いところもあれば思わしくないところもある。粗捜しをして粗の少ないものに良い値をつけるのである。こんなことを言うと、芸術を冒瀆するものと叱られるに違いないが、現実を見れば分る通り、芸術品には高い値がつく。書画であろうと陶器であろうと、みんなそうだ。小説もまた売りものである。小説家は作品を売らなければ飯が食えない。だから自分自身を卑下して売文業と称する。しかし誰かが言ったように、本が擦り切れるほど読むような小説は芸術のなさしむるところであって、真に文学と言えるものであろう。文学はそういう方向へ進むべきであろうが、そういう気運の見られないのが現状ではないのか。文学は一体どういうものなのか。文学は小説ばかりではない。詩もあり、短歌、俳句もあるのだが、時世と共にだんだん衰退して行くように見える。そう見えるというのは眼が悪いかからで、実体は底深く充実しているのだ、と言う人はいない。大学という最高学府に於てすら、文学部は振るわず縮小されるらしい。世の中は変るのである。人工知能が出現し、その目覚ましい発達によって、どうやら人間の影は薄くなりそうである。文学も遠からず人工知能に活躍の場を明け渡すことになるのではないか。血の流れている人間の知能よりも優秀となれば、どういふことになるか。人間は自分の作り出した無機質の知能に支配されるのである。新しい機械仕掛けの神の発明と言うべきであろう。外見は華々しくスマートに見えながら、その内実は恐るべき激動の世紀である。（つづく）

こういう人間の消滅をほのめかすような議論は止めて、芥川賞選考の模様を背にしなが、私のノートに移し残している、文学の衰退を問い詰めた或る論考の、これといったところを参考のために取り出してみよう。論者は小池多米司氏で、平成六年に、同人誌『半身』二五号に載せられた「文学の現在・所在・創造」と題した長文の評論である。因に小池氏は第三七回上半期芥川賞の最終候補に残った人物であるが、私がその論考から最初に抜き書きしたところはこうである。

「小説の解体の原因には、この（人間）の空洞化がある。そして更にわれわれは、この（人間）を消し去ったもの、（人間）を、中はがらんだ人形としてしまったものの元凶—その歴史的社会的な原因として、巨大化して行った知を、科学を、およそ想像も絶した展開を見せた技術を、そしてそれらと緊密一体に結び付いた資本主義を、さらにはその資本主義の（公明正大）な顔である権力を、挙げる事ができる。科学技術と資本主義と権力は、現代を支配する三角形である。このトライアングルの持つ様相は、最早近代とは遠く隔たったものである。

どう見てもこの三角形—日米欧の資本主義権力の統合をこの名で呼んでいるとはよく聞く話だ—は、文学と親しく付き合ってくれそうにない。文学は、買収されてはならず、利用されても、雇われても、飼いきされてもならない。すべて作家は、固く決意し、連帯しなければならない」

終りの三行は訓示に類するもので、だらけた世の中を引き締めるために発せられる道心堅固な、人の上に立つ人の言葉である。規制を取り払えば、正体を失い勝ちなのは世の常である。作家必ずしも聖人君子ではない。尤も、聖人君子では、男と女の悲しくも滑稽な関係は描けはしまいが、何ぶん作家の現世での在りようは難しいのだ。汝買収されるなかれ、利用されるなかれ、雇われるなかれ、飼いきされるなかれと言ってみても、背に腹は変えられぬのである。文学は祈りであると言った人があるが、目に見えるほど世に出ることはなかった。

小池氏はこんなことも言っている。

「作家は月々の文芸誌の要求に答えて量産している日本の作家のように、通俗性の中へ逃げ込むことを考える。日本では、文芸誌の宣伝が、文学の見せ掛けの需要を作り出しているのだ」

この文章の中にある「文芸誌の要求に答えて量産している日本の作家」というのは、流行作家のことであろう。要求とあるが、作家の側から言えば注文を受けることだ。私の知る作家に八木義徳氏がいたが、量産しようにもなかなか注文が来なかった。八木さんは横光利一の弟子で、第十九回・昭和十九年上半期の芥川賞受賞作家である。と言って、流行作家になったわけではないので、思うほどに注文は来ないのである。毎日綱渡りのような生活をしていると漏らしたことがあった。どうしたものかと困っていると雑誌記者が来て原稿の注文をするので、ほっとすると言ったこともある。今年の年収はやっと九十万円だと明かしたこともある。一般の若いサラリーマンの年収が三百万円の頃だ。八木さんには、小池氏の言う訓示は無用であった。その八木さ

んの生活が楽になったのは、読売文学賞を受賞してからであった。その受賞によって、原稿の注文が急に増えたので、八木さんがその賞を大変有難がっていたのを覚えている。流行作家でない限り、作家として生活して行くことは、名を知られているだけ苦しいことなのだ。八木さんは晩年、芸術院会員にもなって天寿を全うし、昔の斎藤緑雨のように陋巷に窮死したという風評の立つことはなかった。

小池氏の言説に戻ろう。氏は物心両面に於て追い詰められている人間の現象をこう捉えている。

「人間は個々の者としては弱く、取るに足らぬ存在であるが、ひとたび（全体者）として一殊に知の所有者、運用者として一立つや、まさに巨人であり、その技術力を以てしてなし得ざるところはない、というのが一文学的造形はさて置き、一現代のポストモダンとしての（人間）の姿なのだ。管理会社は一われわれはまたしても、二者択一の前に立たされている一人間を保護し、人間に安全保障を与えた代わりに、人間を捕え、訓練し、家畜のように温順にし、馴化してしまった」

そして、この管理社会の中であって、文芸の世界がどうなっているかが解説される。

「文士の生活は、産業社会の規格一辺倒の（兵隊）に比べればまだましで、どこか人間の面影を漂わせていたというのである。

しかし社会が、戦後この国としては未曾有の、本格的な大量生産、大量消費の産業社会、消費社会に移行するや、文壇も文士も消えて行った。作家が、明治以来、真摯に取り組んで来た（近代）、（家）、自我、天皇制、戦争犯罪等、大きな、民族的な主題はすべて中途半端、未消化のままに影をひそめ、産業社会の奴隷と化した大衆は書物を捨てて映画、車、スポーツに走った。書物の需要は後退し、出版資本は消費の傾向に見合った作品を量産できる（作家）を、懸賞その他で発掘し、育成し、書かせ始めた」

この指摘は当たっており、世の中の情勢は今も変らぬどころか、もっと露骨になっているのではないか。新聞の大々的な広告や、テレビのコマーシャルは何を物語るのか。「稼ぐことが総て」と言わんばかりである。泥棒は職業として見れば、こんないい稼業はないと小説の作中人物に言わせたのはセルバンテスだが、何故いい稼業かというと、泥棒して収益をあげても税金がかからないからである。近年流行の振り込め詐欺は、泥棒の遠く及ばない巧妙な手口を使う。電話という文明の利器は犯罪を引き起こす上では、一つの革命的な科学技術である。所かまわず指先で操作して様々なゲームその他を楽しませるスマートフォンとかいうものも、又人間を空洞化する革命的な器具ではないか。これは多分私の戯言に過ぎないであろうが。

話を続けよう。小池氏はこんなことも言っている。

「この近代百年、戦後五十年の文学的総括は、なお整った体系的な資料と精査と思索が必要である。ただ、一つ言えることは、未熟、不徹底に終ってしまった自我の追求の持つ意味である。基本的な、（哲学）の思索、追求の希薄さ、薄弱さ、脆弱さが、作家の（人間）の創造に強い骨格を与え得なかったということである。かつて遠藤周作、村松 剛、服部 達らが（形而上的批評）

の旗を揚げはしたが、何もしないで終わった。この責めはむしろ批評家が負わねばならない。社会は結局、市民革命を経験することなく、（市民）を誕生させないまま、ポスト資本主義の様相を見せている」

ここには歴史を通しての西欧と日本の文学の格差が指摘されているが、論者の意識にあるのはフランス革命であろう。フランス人は自国の皇帝とその後を断頭台に送ることによって、市民権を獲得したのであった。そこに国情の違いがある。ヨーロッパは極東の島国ではない。身を養う土壌が違い、古くから哲学を持っていた。哲学は「われ思う故にわれ在り」で解るように、人間に対する問いかけである。そういう哲学を持たない豊芦原の瑞穂の国は、長い間、朝廷と幕府という二重構造によって天下を治めてきた。朝廷は貴族の、幕府は武家の拠所であった。身分の低い民衆にこの構造を打ち壊すことは出来ない。この構造を揺さぶったのは、黒船に乗ってやって来た紅毛の西洋人で、これには貴族も武家も驚き慌てたのである。太平の夢破れ、ここから世紀の世直しが始まるのだ。武家は分裂し、武家の総帥たる徳川将軍を見捨てて、朝廷を担いだ方の武家集団が勝ちを占め、天下統一の政権を握った。世に言う明治維新である。しかし維新は革命ではない。従って民衆は旧態依然で、フランスのように市民が誕生することはなかった。民衆は以前と変りなく大樹の影に身を寄せ、長いものに巻かれるのを得策とする境涯をもって安心立命としていたのが社会の実体であった。これも又、私の妄想であろうか。

もっと身近な話に移ろう。小池氏の政治を見る眼差しである。

「国家とは胡散臭いものである。いかがわしいものである。

作家は、国家なるものの素性について徹底した洞察を持たなければならぬ。

国家が囁きかけて来るところには、必ず嘘がある。

国家がいかがわしい理由の一つは、その身中に無数の寄生虫を養っていることによる。国家を担っていると過信する官僚、国家を私物と錯覚する政治家たちがいる」

国家国民のために身命を捧げると高言する政治家の中には、自分自身のために政界入りする者のいることは、今に始まったことではない。明治維新の立役者の一人である勝海舟が「氷川清話」の中で、「政治とか経済とかいって騒いで居る連中も、真に国家を憂うの誠から出たものは少ない。多くは私の利益や、名誉を求めるためだ」と言っていることで、察しがつくというものだ。「清濁併せ飲む」のが政治家であるというのが社会的通念であった時代があった。その時代というものは、変るのが道筋である。時代が変らなくなったら歴史はストップする。巧く出来ているのだ。政治家が活躍出来るのは、そういう時代の仕組みがあるからである。「実際おれは国家の前途を憂えるよ」と勝は談話の中で言っているが、憂国の情なるものは、そう簡単に社会に浸透するものではあるまい。国家は国民によって構成される巨大な集団であるが、誰もが国の前途を日夜念頭に置いているわけではない。大抵は御身大切が一番の生活をしているのである。つまり政治的イデオロギーより、国家の税金の使い道には感情を尖らすが、それ以上のことには心を使わない傾向がある。小説家の三島由紀夫は憂国の情から割腹して果てたが、国民感情にどれだけ影響をあたえたのであろうか。何があったにせよ、我国は依然として、天子様を上に乗る

豊芦原の瑞穂の国である。それでも時代は進む、見ての通りに。

小池氏の言説に関わったことから、妙なところに辿り着いたが、表題が「世の中」だから、話の辻褄は何とか合うかも知れない。

(完)

先頃、土曜美術出版販売から『石原武全詩集』が刊行された。八百頁に及ぶ大冊である。石原は英文学者で、その方面の知識は該博である。私はこの詩集を読んで、批評めいたことを言うつもりはない。批評はその方面の専門家に任せるのが順当だからである。つまり、教えられる事が多いので生意気な口は利けないという次第だ。

その教えられる事の中で目を引いたのは、「片隅を奪うもの許すまじ」という詩篇にある墓碑銘である。

〃ここに封じられたる屍を掘るなかれ

この骨を動かす者は呪われてあれ〃

注釈によると、これはウィリアム・シェークスピアの墓碑銘（部分）とある。この呪文が効いたのか、シェークスピアの墓が盗掘されたという話は聞かない。このことから私は、デカルトの死後の運命を思い出さざるをえなかった。勿論、私はデカルトの墓のことは何一つ知らなかったのだが、中央公論社の「世界の名著」に「デカルト」があり、その解説の中に、この世界的に有名な哲学者の遺骨のうち頭蓋骨が行方知れずになった不可解な話が出ていて、それが忘れ難いのである。先ずはこんな風に書かれていた。

「ある日、エッフェル塔の川向こうの広場にある人類博物館にはいった。エスキモーの漁具とか南洋土人の編んだ籠とかが型のごとく並び、小学校の生徒が先生に連れられてにぎやかに見ている。だんだん見て最後のところでびっくりした。人類最高の頭脳としてドクロが二つならべてあり、一つはデカルトです。もう一つはサンシモン伯のものだったと思います。デカルトの頭蓋にはあごがついていなく、骨一面に字が書いてあり、読めもしませんが、多くの人が宝として伝えてきたものに相違ない。それにしてもデカルトを、博物の標本にするとはひどいことをするものだと思った。しかしまた、あるべきところにあるのかもしれないと思った。デカルトの骨は、お寺とか歴史博物館とかにあるよりも、自然史博物館にあるほうが哲学的に正しい、という気もしました。あとで知ったことですが、ポール・ヴァレリーもしきりにデカルトの墓を気にし、このドクロを手にとってみたいといい、またデカルトの像がパリにないのはおかしい、彫刻家は何をしているのだ、などとも口ばしり、しかし今から墓や彫像をつくれとは言わぬ、とも言っている。一種のジレンマです」

そもそもデカルトの頭骨を手にとってみたいというヴァレリーの願望は、詩人特有のものであったにしても、私ごとき極東の老木にはなかなか理解し難いものの、その遺骸が墓場になくすれば、その行方を追いたくなるのは遺物崇拜者の人情であろう。一体デカルトの頭骨は墓場を抜け出て何処を彷徨っていたのか。解説者による謎の種明かしはこうである。

「ドクロがそこにある因縁も、そののち知りました。デカルトはスウェーデンで死んだあと、十七年目にパリの寺に改葬されたが、棺を掘り出して運ぶとき、ストックホルムとコペンハーゲ



ンでそれを開いた、とある。そのつど、骨の一部は聖遺物として盗まれたが、頭蓋はすでにストックホルムで誰かの手にはいったらしい。百五十年ののち、大革命後ですが、スウェーデンの化学者ベルツェリウスが、フランスの科学アカデミーの会員に選ばれてパリにきたとき、おみやげにデカルトの頭蓋を携えてきて院長のキュヴィエに渡した。それで今、人類博物館にあることになった、というのです。――デカルトの時代に偉人の骨が大切にされたということは、スウェーデン女王クリスチナの言葉にも現れています」

人間の頭蓋骨が商品として売れるという話は聞かないが、どうも世の中には世界に一つしかないような貴重品を手に入れたがる輩がいるのである。祠に祭られている物が、この上なく神聖な物と思って中を開けてみると、ただの石ころである場合がままあるが、鯛の頭も信心からという俚諺があるように、ご利益があるものなら、信仰の対象は何だってよいということであろう。デカルトは右のような経緯でパリの博物館に納まったのだが、同じ人間の頭骨でも、人類博物館に行くのではなく、戦争の記念品として保存される場合のあることを、わたしは前記の『石原武全詩集』の中的一篇から知ることを得た。二〇一一年の作「金輪際のパラッド」にある「されこうべ」の第一連がそれである。

六つの〈されこうべ〉が引き出しの中で、  
忘れられていたという記事の断片がここにある  
頭蓋はてっぺんから落書きに覆われ  
アメリカ陸軍医学センターの片隅に  
ベトナムの泥沼からアメリカ兵が  
こっそり持ち込んだ土産の〈されこうべ〉は  
灰皿や蠟燭立てやトロフィーに磨かれて  
アメリカの町々で首狩り族の戦果になった

こうなると人間の尊厳と言われるものも空疎になる。戦って殺された上に、その頭蓋が飾り物になって故郷に帰ることも、博物館に展示されることもないのである。つまり、昔からよく言われる何処の馬の骨とも知れぬ死者の無惨な運命である。

もう一つ、これは吉川幸次郎博士の著書「漢の武帝」の中にある例だが、遠い昔のことなので、深刻な響きは伝わって来ない。やはり頭骨の野蛮な扱いを述べた一節である。勿論私は、そのエピソードのような例を探すために、その面白い本を読んだのではない。私の所持する昭和二十八年発行の瀧井孝作の随筆を読み返しているうちに、旧仮名遣いと新仮名遣いを論ずるところがあって、その後に「漢の武帝」の感想を述べているところがあった。

「私は此の本の文章の、分りやすい砕けた、力の勁い所に、亦ひきこまれたのでした。著者は、新かなづかい漢字制限の、新發想の自覺者だけに、カナモジを上手につかひこなして、稚拙な新しい持味を出して、ツカヅカと、目の前にあるやうに、情景が描き出せるのでした。茲には餘り長くなるので引用しませんが、情熱の燃えた文章が満ち満ちて、これは、新仮名とカナモジのうちの、出色のものだらうと思はれました。仮名書きの、子どもつぽい、諧けた調子に、現代の

感覚がよく出ているやうで。」

こうまで書かれると、私ごとき横着者でも、読んでみざるを得なくなるのである。確かにこの本は、普通の歴史小説とは異なる文学であった。そして読んで行くうちに、頭骨の話が出て来たという次第だ。それは武帝が匈奴の捕虜から聞いた情報であった。

「一月氏は、匈奴に、もとの住まいを奪われたばかりか、その王は匈奴にうち取られ、しゃれこうべを飲器にされたと申します。

飲器とは、酒を飲むうつわであるともいい、また小便をする器だともいう。」

この頭骨は王のものである。それを杯に使うのは、使われる王も酔い心地を覚えるかも知れないが、便器に使われたのでは、これ以上の汚辱はあるまい。敗者に救いはないのである。これが歴史の真実というものであろう。

この世の中には惨いことが次々に起る。それも起るべくして起ると言ってよい。因果は巡るのである。何も起らなくなったら人間の歴史は終りだと言いたいところだが、欲が渦巻く世の中、生き延びるために、人間は英知を絞って迫り来る難局を切り抜けるに違いない。妙な締め括りになったが、「われ思うゆえにわれあり」の自覚の希薄な者の行き着くところは、先ずはこんな気紛れの記である。

(完)

軍人などというものは戦争のことばかり考えていて、文学、芸術などには見向きもしない人種と思っていたのだが、それは大変な認識不足であった。例外かも知れないが、海軍の広瀬武夫は文学を見る眼を持っていたのである。広瀬中佐は日露戦争の時、旅順港封鎖で戦死して軍神になった人であるが、どういうわけか、清水港の次郎長と親しかったと言われていた。次郎長は詩人でも作家でもない侠客の代表的人物であった。どうして広瀬武夫が次郎長と懇意であったのかを考察するつもりはないが、この軍人は別の顔を持っていたのである。それを知りえたのは、二〇〇二年四月に発行された「シグノ」という研究会雑誌（六号）からであった。主宰は国際基督教大学で比較文学を教える先生で、論文を発表するのは主に同大学の関係者である。荒木さんは北海道の旧制滝川中学で、現代詩人会の会長をやったことのある木津川昭夫の後輩で、詩の手解きを受けた間柄で、後に鎗田清太郎氏の「火牛」の同人になったこともある。更に私の編集した「時間と空間」に小説を発表したこともある。「シグノ」が私に送られて来るのはそんな因縁であった。大体が学術論文で私の頭には向かないものだから、熱心に読むことをしないで本棚に置いたままでいたのを、近頃になって退屈しのぎに開いてみて、そこに広瀬武夫を発見したという次第である。

それは「文体解剖の試みと困難」という或る人の論文をめぐる座談会の流れの中で、広瀬に関するエピソードが出てくるのである。大体こんな遣り取りである。

荒木 （前略） Kmさんのおばあさんという方が広瀬武夫の研究の資料を島田（謹二一筆者注）先生に貸したことあるの？

Km 曾祖母が広瀬武夫さんとロシアでお会いして――曾祖父が外交官だったので、ロシア語だったので、ロシアに行ったときに広瀬さんがいらして。で、あの、曾祖母はまだ新婚で、若かったんでしょね。それで、広瀬さんと……何ででしょうね、どうしてデートしたんでしょね。で、お話など、こう、公園なんかに行って、曾祖母が何かフロストかワーズワースか、なにか英語の詩を吟いたらば、まさかと思ったその後をスラスラと広瀬中佐が詩を最後まで続けたとか。それに感激して、ポーッとなって。

それでまた、或る時は暴れ馬が突然やってきたんですって。二人で歩いていて。そうすると広瀬中佐が前に立ちはだかって助けたという。それがとても嬉しかったと。その二つの話は、随分老人になってからもよく覚えていて、なにか昔話を、と言われたときには昨日のここのように話したっていうのが語り草になっているんです。

荒木 それは確か、島田先生の「ロシアにおける広瀬武夫」の中に出てくるね。

Km 出てくるんです。まるまる一章、その話なんです。騎士的な、すごくカッコイイ。で、教養もあって文武両道っていう。それで曾祖母がポーッとよかったらしい……

荒木 川上総領事夫人とかいう……

K m そうです。

荒木 そうだね。僕の記憶は確かだ。だからね、あの「ロシアにおける広瀬武夫」っていうのには副題がついている。「無骨天使伝」……ああ、そうか。川上総領事夫人はあなたの曾祖母になるのか。写真も出てるよね。扉か何かに。綺麗な人だよ。

K m 写真を撮られるのが好きな人で、いっぱい肖像写真が残っていたんで変だなあって（思っていました）ドレスを取っかえ引っかえ着て、ロシアで……。英語を随分やったようなので英語は達人だったんですけど、その分、日本語が下手だったんで、すごい下手な短歌を作って……「富士に向かって走るタクシー」とか（笑い）。飼犬のジョンについて「ジョンちゃんや」とか。佐々木信綱先生に習ってそれしか作れなかったって、変な人なんですよ。

最後のK mの語るところは省略してもよいのだが、短歌の条が子規の短歌に対する見方と関係があるので、そのまま出しておいたのである。西洋の詩を口ずさんだ広瀬武夫だけでこの稿を終るのは物足りないからでもある。

荒木さんは、あるところでこんなことを言う。

『「毎年よ彼岸の入りの寒いのは」って言ったのは、あれ、子規のお母さんが日常の会話で言ったんだよ。そしたら子規は感心して「はあ、これは立派な俳句だ」と。「毎年よ彼岸の入りの寒いのは」それで、すごく感心してそれを書き留めて、そのとき日常の言葉は文学になっちゃった』

これは子規だから気に留めた日常の言葉で、わざわざ作ったものではない。つまり、子規の母は自分の言葉が俳句になるとは露ほども思っていない。「富士に向かって走るタクシー」とは大間違いだ。

## 閑話休題

人間は文字によって、紙上に感情やら思想を表現する。それを人が読む。口から出る言葉は泡沫の如く消えてしまうことは、誰でも知っていることだ。ところが、泡沫の如く消えてしまわない言葉がある。人を傷つける言葉だ。差別語は人を傷つける最たるもので、現代人はそれに甚だ敏感で、その反応が世の中を動かすほどである。「シグノ」座談会で、「文体解剖の試みと困難」の論者齊籐一誠氏がこんなことを言うところがある。

「——この広告コピーを書いた仲畑さんは、今度の長野パラリンピックのポスターのために「手がなくても、人間。足がなくても人間」というようなコピーを書いた人です。物議をかもして、結局ポスターが回収されたわけですが、私はそのことについていろいろ考えさせられました。結論としては、そのコピーのような表現がのびのびと通用する社会に早くなればいいと強く願いつつも、いま現在それで傷つく人がいる以上、また、そういう人がいる間は、このコピーは暴力になる。だからポスターの回収は正しかった、という考えに至りました。言葉というものには、社会に受け入れられる限度というものが、時代によってあるような気がします」

因みにこの発言の初めにある「この広告コピーを書いた仲畑さん」の広告文を、参考のために本文から引用してみよう。

「頭を切り替えるって、タイヘンむずかしい。拭く、と思いこんでいたものを、いきなり「洗うのがタダシイ」と言われても、ハイそうですかとはいかない。今までの人生を間違いだというのか、と、いえ、たかがおしりの話でもですね、つい感情的になってしまう。でもね。冷静に考えると、なるほどタダシイ。「拭くより洗うほうがきれい」その通りですね。「拭くより洗うほうがやさしい」これもその通り。おしりほど傷つきやすい場所はないって、日本人ならイタイほど知っているものね。だから洗いましょう。いいことなら習慣にしていましょ。だって「日本人のおしりは欧米人より清潔でない」なんてウワサが広がったら、困るものね」（仲畑貴志 TOTOウォシュレットの広告）

これは便器を売るための宣伝文であって、人を傷つける広告ではない。日常生活の衛生を向上させるには、こういう便器が好ましいという推奨文であるから無害である。けれども、文体解剖の試みの対象とするには次元が低い。それでも、文章の比較には必要な例であるに違いない。従って論者は、便器の宣伝文に比べて遙かに高度で、姿勢を正して読まなくてはならないような文章を、幾つも呈示するのである。例えば、大塚久雄という社会学者の著書からの、こんな一節がある。

この「職業」倫理への貪欲の進入は全く徐々にかつひそやかに行われた。だからこそ「資本主義の精神」はその初期にあつては、未分離のまま、プロテスタンティズム特にカルヴァニズムと結びついてきた。しかし貪欲の蝕みがいよいよ露わとなるに至って遂に「資本主義の精神」はその宗教的外套をぬぎ捨てる。いかにしてか。「職業」倫理から信仰の根が抜け去り、神が見失われ、これに代わって富が入り込んで来る。今や「職業」倫理は、栄光を増すためではなくして、できる限り多くの貨幣を追求するためにあらゆる営みを合理化し、これに全力をつくすという倫理に墮ちて行く。

（大塚久雄「経済と宗教」、『宗教改革と近代社会』）

このような言説は、その分野の研究者でないと理解困難であるが、経済至上主義の現代社会の動静から見ると、私ごとき者でも何となく解る気がする。貪欲は諸悪の根源である、と昔西洋の聖職者が言った話を本で読んだことがあるが、カルヴァン派の坊さんであったのかも知れない。儲けた金は社会から吸い上げたものだから、社会へ還元すべきであるとするのは修正資本主義だが、そんな思想は見る影もない。「金が仇の世の中」は昔の言葉だが、よく言ったものだ。「墮ちて行く」という言葉が文尾にあつたが、墜ちて行くというのは、資本主義精神ばかりではないようで、私は論者の文体解剖の試みよりも、呈示される文例そのものに注目するのである。次の文章を読むと、戦後は遠くなりけりの感を覚える。久野収という学者の憲法についての見解である。（つづく）



小島政二郎の『眼中の人』を友人から贈られて読んだ。文章が読みやすく、親近感がわいてくるような雰囲気があった。小島自身の自伝的な内容で、文壇に新人として入るところから、そこで出会った当時の文壇人たちの意外な横顔を描いている。それがテンポのいい文体で語られて、興味をそそられた。そこで『小島政二郎全集』の第三巻を図書館で借りてきた。この巻には作家たちを取り上げた小説が並んでいる。芥川龍之介、森鷗外、鈴木三重吉、永井荷風、久保田万太郎、佐藤春夫、直木三十五、高田保と、これだけの作家が取り上げられている。いずれも評伝ではなく、小説としているから「実名小説」とでも言うべきものであろうか。しかしなんとなくこれが列伝として読めてしまう。ここに登場している作家たちは、著者小島の直接知っている人たちばかりである。そうした意味で小島が観た作家たちの偽らざる姿を描写したものと思えた。まずは芥川から読んでみた。

### 『芥川龍之介』

自殺に近いころの芥川龍之介の健康状態はかなり悲惨なものだ。胃腸が悪い、繰り返される下痢と便秘、重い痔疾、睡眠障害、どれひとつとっても軽視できるものではない。しかしこれが自殺にまで結びつくものだろうかという疑問は残る。これらの病気はわたしもすべて経験がある。二五歳過ぎから胃潰瘍・十二指腸潰瘍を患い、痔疾も長いこと悩まされた。十代のころから心の不安に冒されて、睡眠障害はひどいものだった。しかし何とか乗り越えてここまで生きてこられた。これらの疾病は克服できないものでは決してない。いろいろ負けそうになりながらも、抵抗してゆけば道は開けてくるはずだと思う。

芥川は睡眠薬と精神安定剤を使ったけれどほとんど効果がなかったらしい。当時の薬品の質ということもあるだろうけれど、使い方が慣れていなかった可能性もありそうだ。この薬は自分で使い方を発見することによって、しだいに思い通りになってゆくものだ。わたしは長年使ってきて、今でも睡眠薬と安定剤は必需品である。定年後少しの間使わなかった時期があったが、その後時々使うようになって今に至っている。現役の頃は使わない日はなかった。それでもその副作用のようなものは感じられない。世の中には睡眠薬とか安定剤を使うことを恥ずかしがったり、恐れたりする傾向があるけれど、これはまったくの見当違いというものだ。近代人なら薬品を使いこなすことこそ、生きる知恵であると思う。プロ野球の元大投手が、大試合の前には安定剤を使った、と引退後に告白している。それで勝利に貢献できたのなら、正解ではないか。

芥川は睡眠薬とか安定剤の使い方には、いずれ慣れていったはずだと思う。ぐっすり心ゆくまで安眠をむさぼることが出来たなら、自殺はしなかっただろう。胃腸の病気も、ひどくなれば入院して本復に専心するとか、生き抜く方法はいくらでもあったはずだ。それらの病も彼の心を蝕んでいたであろうが、もっと深刻な問題も抱えていたはずだ。そのひとつに梅毒があったと想像する。中国で遊んだときに感染した梅毒が、貴族趣味の芥川を震え上がらせたであろうことは

想像にあまりある。梅毒は当時は不治の病であり、脳梅に至る先行きを考えてその悩みは尽きなかったであろう。自殺に近いころに激瘦せしたことは、梅毒による可能性が大きいといわれているし、芥川自身そのことを意識して絶望したに違いない。

芥川の巨根は有名で、広く知られた事実である。精力も人一倍強く、紅灯の巷に赴いては娼婦相手の遊びに打ち込んだらしい。それも普通の遊びでは満足せず、遊具を用いた遊びを好んだ。今でいう「大人のおもちゃ」をどこからか多種入手してきて、友人に見せたりしていた。想像力の発達したインテリの遊び方として、よくあることだ。特に異常だとかいうことはないと思う。梅毒に罹ってしまってから、そうした遊びを罪深いものとして後悔の念に襲われることもあっただろうが、だとすれば悲劇的である。梅毒がその自殺の主因と決め付けることは出来ない。もっと深いところで悩んでいたかもしれない。しかし梅毒は彼の心を蝕んでやまない大きな要素のひとつであったことは間違いないと思う。

小島政二郎はこうした事実を知らなかった筈はない。にもかかわらずそのことに一切触れていないのは何故なのだろうか。このことを避けて書いたことによって、説得力の乏しい結果になったことは否めないと思う。小島にとって芥川は尊敬する先輩であり、恩人であり、敬愛措くあたわざる存在だった。それゆえにそうした恥ともいえる面に触れることを避けたのであろうかと思われる。

このことの根底には、性は罪深いもの、恥すべきものという観念がある。儒教思想はもとより、キリスト教、仏教でも、性を罪深いものとしてきた。しかしこの観念は、初めからそうだったわけではない。イエスが説いたキリスト教、仏陀が説いた仏教において、性を罪としてはいない。およそ時の権力がこうした宗教を政治的に利用しようとし、宗教側も富と権力を得てから、この観念が人々を束縛するようになっていった。この歴史的事実をもっと認識すべきだとかねがね考えている。

性は本来罪深いものでもなければ、恥すべきものでもない。おおらかな古代文明においては、性を謳歌して生命の泉として讃えこそすれ、罪深いものとはしていなかった。その後の権力支配に都合よい「性イコール罪」という観念が支配して、その観念に近代人も捉まったまま解き放たれていない。観念的には判っていても、現実には尻尾を掴まれているのが実態ではないだろうか。

小島はもとより、芥川もそうした観念から脱却できていない。彼の教養もそうした意味では、誤った観念を跳ね返す力にならなかった。しかし小説家に限らず、芸術家にそうした「業」は強くあり、それ抜きには存在しえぬものである。梅毒にかかった芸術家は調べてみれば意外と多く存在すると思う。その方面での調査研究が今後なされることを期待する。クラシック音楽の作曲家たちの病気について書いた後藤雄一郎氏の『音楽夜話』がある。この書によって、いかに彼らが病気もちであったかを知ることが出来て、生きる勇気さえ湧いてくる。結核と梅毒が圧倒的に多い。健康だった作曲家はハイドンとワグナーくらいで、ほかは惨憺たるものだ。梅毒を病んでいた作曲家の主だったところでは、ベートーヴェン、シューベルト、スメタナが居る。芥川は恐れることはなかったはずだ。自殺するには及ばない。

このように小心であるということは純真でもあり、全身で悩み抜いたのである。ある種の愚かしさも具えている。であるからこそ、芥川の芸術はひとの心を打つのである。



## 『永井荷風』

永井荷風についてはわたしもエッセイを書いているので、ぜひ読んでみたかった。この作品は発表をためらったという話を聞き及んでいるので、思い切った踏み込みがあると期待していた。しかしそれは期待外れに終わった感が深い。

面白いと思ったのは、荷風の日常を目撃したその報告である。一人暮らしの荷風がデパートにおかずを買いに来たところに偶然行き逢った。そのときの印象として「その物色している物腰の貧しさが不思議だった」と書いている。さらに電車の中で、

「席を立つ人がいはしまいかと荷風がキョロキョロする目の使い方の品のなさ、立った人のあとに人を掻き分けて坐る時の素早さ、そこにも私は荷風の心の貧しさを見た」

と書いている。こうした姿のみつともない印象は実際にあっただろうとは思ふ。それが果たして「心の貧しさ」なのだろうか。この描写の中に、小島の荷風に対する冷めた気持ちを遺憾なく露見させており、それは小島の見通す力の限界をも考えさせる。

荷風が慶應義塾大学に勤め「三田文学」の編集をしていたとき、小島が作品を投稿し、荷風宅に接見しに行った。ところがその作品を見もしないで送り返し、訪問したときもあからさまに嫌う態度をとって追い返したことが書かれている。小島が荷風によい印象をもっていなかったわけだ。しかしこの時期は荷風にとって、最も重要な時期にあった、まさにそのときに当たっている。大逆事件の被告たちのことを考えていたのである。無実でありながら死刑に処せられる被告たちを救うことが出来ない自分が、一流の文学者足り得ないと思ひ定めて、その後の生き方を自ら貶めてゆく決意をしたときだった。そうした社会的問題に大きな関心を持ち、自分自身の対処の仕方に悩むというのは、文学者として本物の証拠であって、荷風はその意味では間違いなく「本物」だった。

そんなときに若い学生がそうした社会問題に無関心でいる姿勢に、会いたくもないと思ったのは当然と思う。その甘っちょろいお坊ちやまの本質を肌で感じただろう。それを忌避する荷風の気持ちは痛いほど分かる気がする。山田幸伯の「敵中の人―評伝小島政二郎」によれば、のちに荷風は、朝日新聞に小島が自分のことを書いているのは「其の記すところ皆虚偽なるべし」と切って捨てたという記述がある。荷風と小島とは、まさに敵中の人だったといえよう。

戯作者を自認した荷風は徹底したエゴイストとして日常を過ごしてゆく。それがあまりに徹底していて、大きな迷惑を周辺に及ぼし続けた。「同調圧力」のことさら強い日本社会の中で、これだけ同調圧力に抵抗した生き方を押し通した人をほかに知らない。まことに貴重な存在といえる。古来芸術家は世俗の中では誤解のさなかに置かれるものだし、「変わり者」の謗りを免れるものではない。それが表面的には「物腰の貧しさ」と見えようが、「品のなさ」と受け取られようが、それが自然の成り行きというものではなかろうか。そこをもって「心の貧しさ」を見るのは、その視力に近視を疑うほかない。小島はどちらかという、常識をわきまえた紳士であり、それだけ世俗に近い存在だったと思われる。荷風の本質を見抜いていなかったと断じてもいいかもしれない。お国のためだとして軍の慰問団に加わり、中国各地に出かけている小島に、軍を

徹底的に嫌った荷風の心が理解できただろうか。

「荷風の一生は、人間を信じる事が出来なかった人間の悲劇だと思う」と書き「人が信じられなければ、金でも信じるより外に生き方はなかったろう。だんだん彼の周辺から人間が遠ざかって行った」と書くに及んで、小島政二郎にとって荷風は理解しがたい人だったことが分かる。己の自由を守るために「金」を武器とした生き方を理解できていない。こうした見方はまさに世俗的常識的なものであって、荷風を論ずるには荷が重かったといえると思う。(つづく)

『鈴木三重吉』

「月の砂漠をはるばると 旅のらくだが行きました」（加藤まさお）

「さんごじゅの花が咲いたら、咲いたらといつか思った」（北原白秋）

「去年遊んだ砂山で 去年遊んだ子を思う」（西條八十）

「赤い靴はいてた女の子 異人さんにつれられて行っちゃった」（野口雨情）

「きんらんどんすの帯しめながら 花嫁御陵はなぜ泣くのだろう」（落谷虹児）

「どこかで春が生まれてる どこかで水が流れ出す」（百田宗治）

これらの童謡を思いつくままに書き並べているだけで、胸ふくらむ思いがする。それもあたたかく、あまく、心地よく胸の奥に沁みこんでくる。

あるいはまた童話『一房の葡萄』（有島武郎）を何度読んだことだろう。それはまさに生きる勇気を与えられ、苦しさから開放される場を与えてくれたのだ。『宝島』『トム・ソーヤー』『小公子』『クオレ』『家なき子』などの世界に浸って、心の栄養を得て、体の栄養不良を補っていたという実感がある。この表現は不穏当かもしれない。しかし実感として栄養失調死から救われたのかもしれないのだ。そうした実感が確かにある。

わたしは二歳で父を失い、母の手ひとつで育てられた。母の和裁とか内職などほとんど収入にならず、飢えに苦しんだ日々だった。戦中戦後のみなが飢えたころ、こうして生き延びることができたのは奇跡といたいほどだ。戦後の混乱が収まって、みなが生活に余裕が出てきたころでも、銭湯に行けるのは年に数回、冬でも足袋とか靴下を履いていなかった。学校の遠足に参加したことはない。記念写真というものは買ったことがなかった。みなが弁当を食べる中で、なにもなくてただ机に向かって黙っていた。栄養失調で血液が薄く、ふらふらしていた。しょっちゅう熱を出し、学校を休みがちだった。劣等感が強く、いじめられてばかりいた。

そんな日々、慰めはただひとつ、うちにあった『小学生全集』などで読むことができた「童話」と「童謡」だった。それともうひとつ、父が残してくれたクラシックの名曲のレコードがあって、蓄音機で聴くことができた。使用済みの鉄針を砥石で研いで何度も使った。あるいは竹針をハサミで切って先を尖らせて使った。「波濤を越えて」「軽騎兵序曲」「ハンガリア舞曲」といった小曲が多かったのは、SPレコードが三分の再生だったからだ。大判の三枚組でシューベルトの「未完成」があった。何度も繰り返し聴いたので、どの部分を聴いてもすぐに「未完成」と判った。これらから得ることが出来た「心の栄養」は、不足しがちな「体の栄養」を補ってくれた。ほとんど死に近いところに居たことは確かだ。何も食べるものがなくて、動くこともままならないとき、庭にいた蛙を捕まえて、その脚を食べた。火に炙ると骨から取れる白身の肉は柔らかく、食べた瞬間から全身に血が通い、生き返る実感を味わった。あの頃もしも心の栄養が

なかったら、死に至っていたかもしれない。大袈裟ではなく本当にそう思う。

アウシュビッツの極限状況を生き抜いたフランク博士が書いた『夜と霧』のなかで、ひとが生きるには絶対に足りない栄養でも生き残れたのは、心の栄養を得ることが出来た者だけだった、という意味のことを書いている。荒々しい者は真っ先に倒れていった。繊細にして、優しい心を持ち、一輪の野草の花に感動できる者だけが生き残ることが出来た、という記述を読んだとき、まさにその通りだと思った。わたしの過ごした環境などアウシュビッツとは比較にならないだろうが、体の栄養が足りなくても、心の栄養がそれを補うという指摘は、実感として共感できる。

当時読んだ童謡でもっとも気に入ったのは、西條八十のそれだった。ほとんど暗記していた。今でもそのいくつかはそらんじることが出来る。中年過ぎに古書店で『西條八十童謡全集』を見つけたときは買わずにいらなかった。今でも本箱の一隅にあって、ときどき開く。童話も同じものを何度も繰り返し読んだ。

こうした童謡と童話によって命を救われた。その原点といえば「赤い鳥」であり、その創造者であった鈴木三重吉にある。大袈裟に言えば命の恩人といっていい。その鈴木三重吉という作家の人物像を本作品で読むに及んで、ただ仰天するばかりだった。

小島政二郎は鈴木三重吉の私生活を間近に見て、仕事も一緒にやっているのだから、その実像を知りすぎるくらい知っていた。よってこの巻の中で一番読み応えのある作品になっていると思う。その我が儘勝手な、個性の強すぎる、迷惑極まりない実像を具体的に描いていて、ひたすら驚異である。とくに美人であり、性格もいい奥様を、殴る蹴るの狼藉、サディスティックな異常さは、その「赤い鳥」という仕事から受ける印象とはあまりに遠すぎる。耳の孔に鉛筆を突っ込んでかき回すような暴力に耐えかねて、奥さんは小島のところに逃げ込んでくる。小島は自宅に保護することも適わず、尼寺に匿われる。逃げ込むべき尼寺があったという辺り「時代」を感ずる。弁護士に相談したところ「妻は夫に従うものだ」と相手にしなかったというのも「時代」である。

現代だったら許されるものではない。刑務所行きもあり得るだろう。週刊誌も黙ってはいない。とはいえども、現代のこうしたあり方にも問題があるのではないかと考えたくなってきた。誰かが不倫したからといって、こちらに何一つ迷惑がかかることもないし、それはあくまでも個人の問題に過ぎない。それなのに近頃の騒ぎ方は度が過ぎている。場合によってはその人の活動の場がなくなることさえ起こる。政治家だと政治生命を失ったり、芸能人だと干されてしまうようなことになったりする。明らかに行き過ぎだと思う。そこまでされては、伸びるものも伸びなくなってしまう。個人の問題が「スキャンダル」となって喧伝されるという世間の未熟さ、その未熟さに迎合して騒ぎ立てることが、大きな力をもって伸びるものも伸びなくさせている。この現象は政治経済をはじめ社会全体に及んでいて、ちまちまとしたキャラクターばかりが前面に出てきて、大きなものは育つ前に抹殺されてしまうような土壌となっている。まして芸術家なら、並大抵の個性の強さではないのだから、やらせるだけやらせて欲しいと思う。許されるか

どうかは別問題とはいえ、あまりに干渉し過ぎるのはやめてほしいものだ。現代だったら鈴木三重吉の赤い鳥運動は果たしてこんな大きな実りを生んだかどうか、きわめて危うい。鈴木三重吉の乱暴狼藉は「業の深さ」という言葉では済まされない、それ以上のなにかであろう。

それでも彼のなせる仕事の偉大さはいささかも翳るものではない。当時の小説家に童話を書かせ、詩人には童謡を書かせ、多くの名作を世に送って、子供たちの夢を育てた功績は高く評価されてしかるべきものだ。当時の詩人・作家もよくこれに応え、貴重な名作を残してくれている。それまでの呼称であった「お伽噺」を「童話」とし、文学の一ジャンルにまで押し上げている。戦後は「児童文学」と呼び名を変えているが、「童話」の方がわたしにはなじめる。「赤い鳥」の発行は一つの運動として大きく広がり、「こども雑誌」「金の船」「童話」といった雑誌が次々と創刊された。西條八十の「かなりや」「唄を忘れたカナリヤは」に成田為三が作曲してレコード化されると、童謡として初の大ヒットとなった。するとこれに続いて弘田龍太郎が北原白秋の「雨」「雨が降ります雨が降る」を作曲してヒットし、次々と名曲が生まれた。かくして童謡歌手が誕生し、作曲家とレコード会社を潤わせたばかりか、明治以来の「唱歌」あるいはもっと以前からあった「わらべ歌」を芸術的に大きく飛躍させた。これらの歌によって子供たちがどのくらい慰められ、勇気づけられ、心を膨らませたことだろう。さらには「コドモノクニ」という童画専門の雑誌が創刊され、多くの絵描きが美しく暖かい童画を描いて、子供の夢を広げた。ここには北原白秋をはじめ多くの詩人も協力している。

「赤い鳥」が世に出ていた頃というのは、多くの日本人が「懐かしさ」をもって思い出される時代であろう。明治時代という怒涛の時代が過ぎて、昭和時代という戦乱激動の時代を前に、短期間ながら平和で豊かな余裕の時代が日本近代史の中に用意されていた。「大正ロマン」と称されるベルエポックともいえるべき時代を象徴するひとつが「赤い鳥」だったと思う。

ついたり

ここに感想を記した三人のほかでは、『直木三十五』が面白かった。直木三十五といえば芥川賞と並んで「文藝春秋」の文学賞でおなじみだ。しかし直木三十五がどんな作品を書いた人なのか、怠惰なわたしは何も知らない。それだけにこういう人だったのかと面白く読めたという点はある。この人も破天荒な男であって、そのすごさにおいて上記の三人にいささかもひけをとらない。

人格の円満ならざること限りない。家庭においては暴君にして女を泣かせ、それでいて外では女にもてる才能をもっている。自分のために尽くしてくれた女には一切報いることなく、浮気に次ぐ浮気の生涯だった。金にだらしく金に亡者であり、タカリといわれてもまだ足りないほどだ。自惚れは芸術家の栄養剤といわれるが、それも度を越した自惚れ屋である。

「小さな親切運動」という言葉があったが、彼らの生涯はまさに「大きな迷惑運動」を展開したものだ。この書に挙げられた作家の多くが該当する。直木三十五はもとより、鈴木三重吉

、永井荷風あたりがその際たるものだろう。これらのひとつとにいえることは、根源的な欲求が並外れて大きいという共通点をもっていることだろう。性欲はもとより、自己顕示欲、物欲、金に対する執着、こういった欲求がとてつもなく大きいという厄介なエネルギーをもち続けている。これは芸術家の資質として重要なもののひとつであることは間違いない。よって常に周囲との摩擦を起こすことになる。

世界的に見てもその例は多い。芸術家は日常生活的には破綻者が多く、直接知る人にとって軽蔑の対象にこそなれ、その偉大な仕事に結びつかないものだ。岡本太郎によれば、セザンヌは南フランスの地元では「あのへっぽこ絵描きの絵が、パリのインチキ画商の手で高く売り込まれている」と信じている人が居たということだ。周囲から理解されないことによって、貧困から逃れることができず、自殺したり飢え死にしたりした芸術家も数多くいる。そんな場合に限って死後に売れに売れるといったことが起こって、その落差の大きさに人々が嘆き驚くことになりがちである。

ところが時代が進んでくると、芸術家も利口になってきて、今では非の打ち所のない紳士として立派に通用する芸術家が登場している。立派な肩書きをもっていて、りゆうとした身なりに身を固め、言葉遣いもさわやかに世を渡ってゆくような芸術家も出てきている。非常識で、自分をコントロールできなくては、芸術家としても不利だということになると、それをクリアーして芸術家として成功するという人物が出てくることになった。さてそれで人の心をどれだけ感動させる作品が出来ているのか、その辺はこれからのことになりそうだ。

(完)

きょう片岡にひとり居て

おとそ気分でカルタを取れば  
横顔クィーンの札がない  
お供も連れずただ独り  
今頃いずこにおはします  
これではならじと百人一首  
寄る年は冬ぞ寂しさまさりける  
ハゲ光れとは祈らぬものを

この拙い戯れ唄は数年前の年賀状に記したものだ。後半は百人一首のもじりで、前半は西條八十の童謡「曇る夜」のパロディである。その元の童謡はこのようなものである。

曇(みぞれ)ふる夜に  
かるたをとれば  
可愛い兵隊(ジャック)の札が無い

赤い帽子(シャツポ)に  
短剣さげて  
どこへ紛れて行ったやら

曇ふる夜に  
さびしく偲ぶ  
可愛い兵隊のひとり旅

この童謡は童画の雑誌「コドモノクニ」の大正一四年五月号に載せられたものである。この横に描かれていた挿絵が素晴らしかった。その挿絵画家は武井武雄である。わたしは子供のころに、『小学生全集』で読んだこれら西條八十の童謡に、どのくらい夢をかきたてられたか分からない。とくにこの作は大人になっても忘れられないひとつになった。このほかにも今でも覚えている童謡がいくつかある。そのひとつにこんな童謡がある。

つくしんぼ

見知らぬ人に負ぶわれて  
越えた旅路のつくしんぼ

見知らぬ人は黒外套(くろまんと)  
顔もおぼえず名も知らず

いづくの国か いつの世か  
月さえほそい春のくれ

きょう片岡にひとり居て  
夢のようにもおもいだす

見知らぬ人に負ぶわれた  
遠いその日のつくしんぼ

この詩にいたく心惹かれた少年のわたしは、その「片岡」というところは何処にあるのだろう、ぜひ行ってみたいと夢ひろがり、地図を取り出して探しに探した。いくら探しても見つからない。しまいには物差しで地図の上を少しずつずらしながら探しても、見つからなかった。長ずるに及んで、索引を使うことを覚えてから見つけることができた。

そこは琵琶湖の北東に、ひっそりと控える余呉湖の近くにある小さな町であった。この見知らぬところ、そして何かロマンを掻き立てるこの地へぜひ行ってみたいと願いつつ、いまだ実現していない。しかしその後調べてみると、奈良県北葛城郡王寺町付近に丘陵があり、生駒山の東南裾にあたり、古代の歌人たちが「万葉集」ほかに、盛んに歌に詠み込んでいるところがある、と判った。これなら正解に近いかなと思った。

ところがごく最近、この詩を見た人から次のような指摘を受けた。片岡は地名ではなく、上田敏が訳した『海潮音』のなかにロバート・ブラウニングの「春の詩」という作があり、その一節に「片岡に露みちて」があるので、それではないかというのである。西條八十は当然この詩を知っていただろうから、その可能性は確かにある。片岡を地名と限定しないで、片方が切り立った岡、あるいは孤立した岡とすると、それはそれでスケールが大きい。いずれにしろ「きょう片岡にひとり居て」という一行に言い知れぬロマンを掻き立てられたのである。

西條八十が童謡を発表するようになったのは、鈴木三重吉の「赤い鳥」である。大正七年九月号の「赤い鳥」に、まず発表したのは「薔薇」という童謡であった。その年の十一月号に発表した「かなりや」が彼を大きく飛躍させることとなった。



唄を忘れた金糸雀は 後ろの山に棄てましょか。

いえ、いえ、それはなりません。

という誰でも知っている童謡である。この作品が気に入った鈴木三重吉は、節をつけて唄うようにしようと思い立った。この天才的な発想(ひらめき)は見事に当たって、成田為三の作曲でレコーディングされると大ヒットとなり、童謡レコードの第一号という名誉も担った。

西條八十がラジオで語った時の肉声を覚えている。ある小学校に行って講演したその帰りに、門まで校庭に並んだ生徒たちが、声をそろえて「かなりや」を唄って送ってくれた。そのとき涙が出て止まらなかったと話したのを、印象深く覚えている。

のちに西條八十が語るところによれば、「唄を忘れた金糸雀」とは、詩が書けない自分自身のことを詠ったという。そして「象牙の船に、銀の櫂 月夜の海に浮かべれば」とは、鈴木三重吉が与えてくれた檜舞台のことだという。「赤い鳥」が大受けすると、子供向けの雑誌が続々出版された。「金の船」「童話」「とんぼ」「少年倶楽部」「櫂の実」「コドモノクニ」……。それらの中の一つの雑誌から原稿依頼を受けたとき、鈴木三重吉への恩義から自分が出すことなく、茨城県に埋もれていた野口雨情を推薦した。野口雨情は以前から知っており、その才能を買っていたのである。そこから野口雨情も作詞家として活躍し「七つの子」「赤い靴」「青い眼の人形」「シャボン玉」「証城寺の狸囃子」「雨降りお月さん」「あの町この町」などの名作を残し、歌謡曲でも「船頭小唄」「波浮の港」などの名曲を残した。

八十は有名になるにつれて「童話」「婦人倶楽部」「婦人画報」の選者を務めるようになり、投稿されてくる詩に数多く接した。その中に山口県仙崎(現長門市)から投稿してくる金子みすゞの詩を高く評価して、どんどん発表の場を与えた。あるときその原稿料を送ったところ、そっくり送り返ってきて「西條先生のお好きなお菓子でも買ってください」という手紙が添えられていた。一度だけ金子みすゞに会っている。「下ノ関」駅頭でのほんの数分の邂逅だったと書いている。(『下ノ関の一夜』)

童謡を作ってそれに曲がつけられて全国的にヒットすると、そこから「作詞家」という道が開かれ、詩人との二足の草鞋をはくこととなった。いったい彼はどんな唄を作ってきたのか。手元にある歌謡曲集三冊から拾って、以下のような一覧を作ってみた。

大正七年(一九一八)「かなりや」成田為三作曲 唄を忘れたかなりやは

大正一二年「肩たたき」中山晋平作曲 母さんお肩を叩きましょう タントントン

昭和二年「パリの屋根の下」の当て詩 巴里の屋根の下に住みて 楽しかりし昔

「お菓子の好きな巴里娘」橋本国彦作曲 お菓子の好きな巴里娘・・・

「風」訳詩 草川信曲 誰が風を見たでしょう ぼくもあなたも見やしない

昭四年「東京行進曲」中山晋平曲 佐藤千夜子 昔恋しい銀座の柳 仇な年増を誰が知る

「愛して頂戴」中山晋平曲 佐藤千夜子 ひと目見たとき好きになったのよ

「鞠と殿さま」中山晋平曲 てんてんてんまり てんてまり

昭五年「唐人お吉の唄」佐々紅華曲 駕籠で行くのはお吉じゃないか

「女給の唄」塩尻精八曲 羽衣歌子 わたしや夜咲く酒場の花よ

昭六年「ルンペン節」ペンネーム柳水巴 松平信博曲 青い空から札の把が降って

「サムライ・ニッポン」松平信博曲 人を斬るのが侍ならば 恋の未練がなぜ斬れぬ

昭七年「銀座の柳」中山晋平曲 植えて嬉しい銀座の柳

「涙の渡り鳥」佐々木俊一曲 雨の日も風の日も 泣いて暮らす

「アリラン」朝鮮民謡に当て詩 アリラン アリラン アラリヨ

「天国に結ぶ恋」柳水巴 林純平曲 今宵名残の三日月も

昭八年「東京音頭」中山晋平曲 ハア踊り踊るなら ちよいと東京音頭

「十九の春」江口夜詩曲 流す涙も輝きみちし 哀れ十九の春よ春

「サーカスの唄」古賀政男曲 旅のつばくろ寂しいかな 俺もさみしいサーカス暮らし

「燃ゆる御神火」松平信博曲 赤き椿の夢のせて

この年、男八〇五人、女一四〇人が三原山に投身自殺

昭一一年「花言葉の唄」池田不二男曲 可愛い蕾よ綺麗な夢よ 乙女心によく似た花よ

昭一三年「旅の夜風」万城目正曲 霧島昇・ミスコロンビア 花も嵐も踏み越えて 行くが男の

「支那の夜」岡信幸曲 戦後進駐軍に接收される 返還は昭和三六年 それまでアメリカ国内で歌われ、ビクター・ヤング編曲の映画「零号作戦」の主題歌「ゴールデン・ムーン」となり、多くの歌手が歌った。

昭一四年「純情二重奏」万城目正曲 高峰三枝子 森の青葉の蔭に来て なぜに淋しく

昭一五年「誰か故郷を想わざる」古賀政男曲 霧島昇 花摘む野べに日は落ちて みんなで肩を

「なつかしの歌声」古賀政男曲 藤山一郎 銀座の街今日も暮れて

「蘇州夜曲」服部良一曲 渡辺はま子 君がみ胸に抱かれて聞くは

昭一六年「そうだその意気」古賀政男曲 雁鳴きわたる月の空

昭一八年「若鷺の歌」古関裕而曲 若い血潮の予科連の 七つボタンは桜に碇

昭一九年「同期の桜」作曲者不明 貴様とオレとは同期の桜 同じ兵学校の庭に咲く

「比島決戦の歌」出て来いニミッツ、マッカーサー 出てくりや地獄へ逆落とし

昭二一年「旅役者の唄」古賀政男曲 霧島昇 秋の七草色ますころよ 役者なりやこそ

「悲しき竹笛」古賀政男曲 近江敏郎・奈良光江 ひとり都のたそがれに

昭二三年「三百六十五夜」古賀政男曲 霧島昇・松原操 みどりの風に後れ毛が

「恋の曼珠沙華」同上 二葉あき子 想いかなわぬ夢ならば 何故に咲いたぞ

昭二四年「青い山脈」服部良一曲 藤山一郎 若く明るい歌声に 雪崩は消える花も咲く

「麗人の歌」古賀政男曲 霧島昇 夢はやぶれて花嫁人形 長い袂が恥ずかしい

「花の素顔」服部良一曲 恋のカナリヤ籠から逃げて

「トンコ節」古賀政男曲 久保幸江 貴方のくれた帯止めの  
昭二五年「越後獅子の唄」万城目正曲 美空ひばり 笛に浮かれて逆立ちすれば  
「山のかなたに」服部良一曲 山のかなたに憧れて 旅の小鳥も飛んでゆく  
「赤い靴のタンゴ」古賀政男曲 奈良光江 誰が履かせた赤い靴よ  
昭二六年「ゲイシャワルツ」古賀政男曲 神楽坂はん子 貴方のリードで島田も揺れる  
昭二七年「娘十九はまだ純情よ」服部良一曲 コロンビアローズ 肩にやさしく手をかけて  
「こんな私じゃなかったに」古賀政男曲 広い世界にただひとり  
「伊豆の佐太郎」上原げんと曲 高田浩吉 故郷見たさに戻ってくれば  
昭三〇年「この世の花」古賀政男曲 島倉千代子 赤く咲く花青い花 この世に咲く花  
昭三七年「王将」船村徹曲 村田英雄 吹けば飛ぶよな将棋の駒に 賭けた命を笑わば笑え

この一覧は西條八十のヒット曲の中のほんの一部に過ぎない。書いた童謡は八五四編（うち訳詩六三編）流行歌が三二〇〇曲という驚くべき多作である。普通の流行歌は、パッと咲いてすぐ散るあだ花のように、その年だけで忘れられてしまうものだ。その中で多くの人々の心に沈み込み、永く唄われる唄はごく少ない。それがこれだけあるということは、いかに西條八十が巨大なヒットメーカーだったか分かる。西條八十に次ぐ作詞家といえば、

佐藤惣之助「赤城の子守歌」「緑の地平線」「人生の並木道」「青い背広で」「人生劇場」「湖畔の宿」「東京の花売り娘」「新妻鏡」ほか、

藤浦洸「別れのブルース」「一杯のコーヒーから」「チャイナタンゴ」「懐かしのボレロ」「南の花嫁さん」「懐かしのブルース」「悲しき口笛」「水色のワルツ」「東京キッド」ほか

サトウ・ハチロー「リンゴの唄」「二人は若い」「黒いパイプ」「夢淡き東京」「長崎の鐘」ほか

あたりになるが、質量ともに西條八十が群を抜いている。

作詞家としてこれだけインパクトの強い仕事をしてしまったおかげで、詩人としての西條八十が埋没してしまった感がある。そればかりか小説家・随筆家・翻訳家であり、アルテュール・ランボウの研究者であり、童話・少女小説の作家であるという多彩な仕事のすべてが、影が薄くなってしまった。大衆の不動の人気を得たばかりに、知識人・文化人・インテリ層にはすこぶる受けの悪い存在となった。とくに良識派といわれる人々が、その低俗さゆえに西條を嫌い、軽蔑し、無視してきた。ほとんど相手にされていない。まともに論評されることもなかった。

ところが二〇〇四年に『ジャズで踊ってリキュールで更けて 昭和不良伝西條八十』という本が岩波書店から発行された。著者は斎藤憐という『上海バンスキング』で名高い劇作家である。この書はよく調査された労作であり、テンポのいいスピード感あふれる文章で読ませる。この年に吉川潮著『流行歌 西條八十物語』が新潮社から発行されている。その翌年には筒井清忠の『西條八十』『西條八十とその時代』が中央公論社から相次いで出された。どうやら無視黙殺されっぱなしではなくなったようだ。とはいえまだまだ西條八十の全貌も知られず、正当な評価を得る

には程遠いのではないだろうか。

## いっそ小田急で逃げましょか

西條八十は明治二五年（一八九二年）一月十五日、東京牛込の大資産家の家に生まれた。乳母として育ててくれたひとは、当時名高い寄席芸人の母だったので、寄席や芝居に幼い時から馴染み、長唄、清元、常磐津、新内から、端唄、小唄、都都逸などを毎夜聴いて育った。父は石鹼工場を経営しており、八十は子供のころから職人たちと食事をともにしていた。お坊ちゃまであると同時に、工員とか職人の気分・息遣いのすぐ傍にいたことの意味は大きい。

中学の頃に早くも文才をあらわし、また女性関係でも早熟振りを発揮している。早稲田大学の文学部に進んで、詩作、翻訳、小説を発表。ところが二十歳のときに八歳年上の兄が、芸者に狂って資産を使い果たし、一家は破産状態になる。残された母と弟と妹の生活を支える責任が八十の肩にのしかかってきた。一家を支える必要から嫁をとることとなり、二三歳のとき新橋駅前の小料理屋の女に一目ぼれして、迎えたのが四歳年下の晴子であった。

晴子の勧めで天ぷら屋になって、長靴を履いて築地に買い出しに行ったりした。それはそれでよくハマっていて違和感はなかったという。ここで八十はいい経験をした。貧乏なものほど人情に篤いという実態に触れることができた。庶民の心を捉える下地は出来つつあった。父の残したわずか三〇円を出版会社に投資して、神保町にある「建文館」という出版社の役員となり、その二階に住んだ。ここへ当時文豪だった鈴木三重吉が訪ねてきて、雑誌「赤い鳥」へ童謡を書いてくれるように依頼した。まだ無名だった八十は大感激して、その依頼に応え次々と作品を発表する。やがて「かなりや」が書かれ、彼を有名人に押し上げた。また自分の出版社で発行している雑誌「英語の日本」にW.B.イエーツ、ラフカディオ・ハーン、モーリス・メーテルリンクなどの詩を翻訳したのが注目され、大正一〇年早大英文科講師に委嘱された。

八十が「建文館」から貰っていた月給は二五円、その中から同人雑誌「仮面」に一五円を支払っていた。純粹詩の原稿料は一切もらったことがなく、「赤い鳥」の童謡の原稿料が一篇につき三円だった。これで一家五人をどうして養うことができたのか。彼は毎日兜町に通って稼いでいたのである。早稲田大学の学生時代から兜町通いに打ち込んで、教室に出たことはほとんどなかった。第一次世界大戦の盛んなるころにぶつかり、上げ相場の波に乗って、ついには三〇万円を仲買店に預ける身分になった。その当時の三〇万円は、今なら何億円という単位になる。その有り余る資金で芸者遊びに粋を凝らすいっぽう、浩瀚な英語の辞書を買ひ、仏文関係の洋書を買ひあさったりしたところは流石である。第一詩集『砂金』を贅沢な羊皮を使い、金装飾を施した豪華本として自費出版した。

西條八十が株式相場に強かったということは、のちに流行歌の作詞家として大成功することと、なんらかの共通点があると考えられる。株式相場というのはいくらも見えない相手と戦い、不特定多数の欲

望なり、向かう方向をいち早くかぎつけ、半歩早く行動することによってチャンスをつかむ。皆が一つの方向に向かって熱気を帯びてきたときは、素早くそこから抜け出して売り抜けることによって、勝利を確定する。いっぽう流行歌というものは、多くの人々の気持ち、願い、欲望を察知して、半歩リードして表現することによって、ヒットさせる。大衆の心を柔軟に、そして大きく掴むことによって、唄の大ヒットも株の勝利も得られるわけだ。しかも一つ当てれば桁違いの大金が転がり込んでくる、というところも同じである。

ちなみに株式相場に通じていた文学者といえば、永井荷風が居る。荷風は戦後までもずっと相場をやっており、それだけ長い間続けられたということは、成績において上々だったとみられる。近いところでは推理作家の山村美紗。彼女は教員だったが、夏休みに株のデイ・トレードで大勝ちして、教職を捨てて作家活動にすすみ、文壇に登場している。片や花柳小説、こなた推理小説と、いずれも大衆小説に本領を発揮した作家だったことは偶然であろうか。

喜劇映画の天才チャーリー・チャップリンは、株式相場でも天才ぶりを発揮して、一九二九年の大暴落「ブラックマンデー」に際し、その寸前で持ち株のすべてを売り抜けていた。大暴落を予感して適切に対処できた極めて稀有な存在だった。チャップリンはその自伝の中で、何を根拠に暴落を予測したかを書いている。結果を知っている我々が読めば、すこぶる当然のことを言っているのだけれど、その当時においては、判っていても実行できるものではなかった。わが西條八十は、チャップリンのようにはゆかなかった。大正九年三月一五日の大暴落に、ほとんどの資産を失ってしまった。人の心を手玉に取って一気に突き進むことにかけては、チャップリンのほうが一枚も二枚も上手だったことになる。

しかしその直後の西條八十は、残った資金でラルースのフランス語辞典を買って「日仏学院」へ通い、ほとんど独学でフランス語を学び、のちにフランスへ留学し、早大の仏文の教授にまでなっている。やはり非凡といわざるを得ない。

最初に出版した『砂金』が、ほどなく一八版を重ねるベストセラーとなった。一挙に評価が高まり、権威ある文芸雑誌「文章世界」の投稿詩の選者となった。他の選者は、三木露風、北原白秋だから大抜擢だった。大正九年に訳詩集『白孔雀』を発刊し、続いて抒情小曲集『静かなる眉』を尚文堂から刊行すると、売れに売れて三〇版を重ねた。第一級の人気詩人となり、とくに女性読者には圧倒的人気となって、花束は来る、ファンレターは来るという騒ぎだった。

大正一二年に関東大震災に遭った。近所の床屋で散髪中のこと、家には老母と幼い娘の嫩子が居て、妻は病氣入院中だった。その見舞いなどいろいろ駆け回っているうちに、上野の山で一夜を明かすことになった。

「地獄のように燃えさかる火災を見ながら、恐怖にふるえている避難民の群れの中で、一少年がハーモニカを吹くのを聞き、またその単純なメロディーが、凄惨な天地の中に、慰撫の天使の喇叭のごとく、やわらかに響くのを感じた。このときの感動が、後日ぼくにレコード歌を書かせる契機となったのであった」（『私の履歴書』）

この夜の体験は、八十自身が何度も書いているように、その後の歌謡曲の作詞に本腰を入れる、大きな動機となったことは間違いない。

この大震災のショックも癒えぬうち、次女の慧子が疫痢で亡くなってしまふ。八十の悲しみはとどまるどころを知らぬ有様、これを見かねた早大の教授がフランス留学を勧めると、妻の晴子が、うちは自分が守るから安心して行ってきて、と頼む。しっかり者の晴子、ひたすら八十に尽くし続けた晴子、それにしては八十は恋のアヴァンチュールが絶えることなく、その留学する船の中でも女流画家と知り合い、パリに着いてからも付き合い続けた。「ぼくの生涯でこのパリ生活ぐらい楽しいものはなかった」（『私の履歴書』）

パリ遊学は二年で終わり、大正一五年に帰国した。早稲田大学仏文科に復帰し、助教授に任命され「フランス語」「仏文学」「近代詩」などの講義を受け持った。「巴里の屋根の下」の当て詩「お菓子の好きな巴里娘」などを書いた。

昭和二年に詩友・日夏耿之介の従兄弟にあたる、樋口正美が訪ねてきた。樋口は日活映画の宣伝部長として「フランス帰りの西條先生にぜひ映画『椿姫』の主題歌を作詞」して欲しいという。八十は快諾して作詞し、松平信博が作曲し、主演女優の岡田嘉子が歌うことになった。ところがこの撮影中に岡田嘉子は新人俳優・竹内良一と恋仲となり、人妻でありながら駆け落ちしてしまい、この歌はレコード化されずに消滅してしまった。しかし八十は嘉子との思い出を「自分を通り過ぎていった美しい花のひとひら」と書いて、深夜彼女の家でともに紅茶を飲んで過ごしたことなど、思い入れよろしく書いている。

このあとまた映画の主題歌「マノンレスコーの唄」を書き、「当世銀座節」を書いた。昭和四年に再び樋口正美氏が映画「東京行進曲」の主題歌を頼みたいとやってきた。雑誌「キング」に連載中だった菊池寛の長編小説の映画化だったが、歌詞は本文に関係なくとも十分流行性のあるものを書いてほしいという。そこでこれまでの二曲が当たらなかったので、もう少しレヴェルを下げて、大当たりをとりたいたいと取り組んだ。

昔恋しい銀座の柳  
仇な年増を誰が知ろ、  
ジャズで踊って、リキジュールで更けて、  
明けりゃ彼女の涙雨

というのがその初聯であった。この作曲を担当したのは、当時この人の手にかかって、売れないものはないとまでいわれた中山晋平だった。中山は「明けりゃ彼女の」を「ダンサーの」としたいというのでその通りにした。その第四聯は

長い髪してマルクス・ボーイ  
今日も抱える「赤い恋」

変わる新宿、あの武蔵野の  
月もデパートの屋根に出る

となっていた。しかしビクターの文芸部長が、官憲がうるさそうだから、初めの二行を書き換えてくれといい、その場でさらさらと書き換えて、傍に居た人を驚かせた。

シネマ見ましょか、お茶のみましょか、  
いっそ小田急で逃げましょか。

この突飛な歌詞の唄を、人気ナンバーワンの佐藤千夜子が吹き込むと、空前の大ヒットとなり、二十五万枚のレコードを売り上げた。この数字は当時の蓄音機の数より多かったので、のちに百万枚以上売り上げたものより、このほうが実質的には多いといえる。莫大な印税収入を得た中山晋平は東京中野に五百坪の土地を買い、七十坪の豪邸を新築した。佐藤千夜子は稼いだお金でイタリアへ声楽の勉強に行ってしまった。これに対しビクターと契約のなかった西條八十が貰ったのは、わずか三十円に過ぎなかった。それにご褒美として電気蓄音機を一台貰っただけだった。こうした作詞家に対する冷遇に西條は敢然と行動し、戦後に至るまでの長い闘いを起こすことになる。この問題については後程考えてみたい。

「東京行進曲」の歴史的な大ヒットに対する評論家から上がった批判も、もの凄かった。退廃的、下劣、卑猥…。発禁にすべきだというのから、中野重治に代表される左翼陣営からも、攻撃の嵐になった。西條バッシングの続く中、これを社会的に捉えたのは詩人川路柳紅ただ一人だった。

「歌は卑俗性をもたないと貧しい一般大衆に受け入れられない。その人たちが好むのは『暖調でしかも一種の哀愁を帯び』たメロディーだ。何故そうなるかといえば、アメリカなどと違って、貧しい日本は長らく『享樂を罪惡視』する封建的感情を持っているからだ」

広津和郎の小説『女給』が映画化されると、当然その主題歌の作詩は西條八十のところへきた。「わたしや夜咲く酒場の花よ」さらには「ひと目見たとき好きになったのよ」と「愛して頂戴」を書く。早稲田の教授が何故にこうまで堕ちななければならないのか。下品だ、エロだ、国民の敵だ、その攻撃はとどまるところを知らなかった。詩人仲間からもほとんど追放の憂き目に遭っている。萩原朔太郎は売文詩人とこきおろした。

西條八十は、芸者遊びの達者なことでは右に出る人がいないといわれた粹人で、女心を歌ったり、芸者などの粹筋の女が主題になるときは、すべて八十のところに依頼がもち込まれた。これを八十は断ることも出来ただろうけれど、喜んで引き受けたのには理由があった。『私の履歴書』の中で次のように書いている。

「想えば、ぼくは不運な詩人で、中学時代から、藤村、晚翠のような流麗な七五調の定型詩にあこがれ、勉強して来た。しかるに中学を出たころには、日本の詩壇には自由詩運動が起り、詩

のかたちは散文とまったく変わらぬものになってしまっていた。ぼくは磨きに磨いた詩の技術の遣り場に困惑していたのである。

作曲される流行歌を書こうとする気持は、この不満の捌け場所をもとめたからでもあった」

こうした詩壇への不満もあつただろうが、それだけではなかったと思う。詩人は自分の表現したいことを謳いあげるのに対し、作詞家は大衆の求めているものを察知して作詞する。いわばアーティストではなく、アルチザン（職人）として仕事をしている。アルチザンとして腕利きと分かってくると、それを世間が求めている以上やらないではいられなかったのではないか。さらに自分が作った唄を多くの人が唄ってくれるという心地よさは、なにものにも替えがたいものがあつたに違いない。一般大衆は、今流行している唄を口ずさむとき、それを誰が作ったかなど知ろうとしない。唄った歌手は知っていても、作詞作曲など知りはしないのだ。だから街を歩いて、誰かが自分が作った唄を唄っている、そのすぐ隣にいても気づかれぬ。作者としてはこの気分は捨てがたいものがあつたと推察する。純粹詩に感動してくれる人はごく一部に過ぎない。それに対し、大衆という圧倒的多数に支持されているという事実で自信を得て、より喜んでもらおうと、レヴェルの低いものを作り、それがよしんば良識派知識人に罵倒されようとも、それほど驚いてはいなかったと思う。

健全で、明朗で、善意に満ちた唄を作ろうと思えばいくらでも出来たであろう。じっさいそうした唄もたくさん作っている。にもかかわらず西條八十は何故にそこまでレヴェルを落として、国民の敵だと言われるまでサーヴィスしたのか。そこまでやらなくてもいいではないか、と誰でも思う。しかし健全な唄では慰められない民衆という存在をよく知っていた。民衆の現実には嫉妬と虐めと不健全に囲まれているのだ。そうした存在には不健全な唄も必要なのだ。日頃の鬱積したもの、うっぷんを晴らすには、国営放送ご推薦の唄ではどうにも馴染めない。天ぷら屋をやっているとき、貧しい職人が腹の減った少年におごってやる姿を見た。震災の夜に避難民のなかで、少年が吹くハーモニカに心慰められた民衆の中にいた。こうした民衆が自分の唄を唄ってくれるということに、捨てがたい喜びがあつたはずだ。八十は育ちがいいだけに、民衆を客観的に見ることができ、何が彼らを喜ばせ、励ませるかを、じゅうぶん分かつていた。（つづく）



## どうせおいらは裏切り者よ

フランス留学中に、日本では新民謡ブームが起こっていた。中山晋平・野口雨情のコンビで「須坂小唄」を作り、佐藤千夜子が現地（長野県）で歌唱指導し、藤間（藤蔭）静江が振り付けて踊りを指導すると、これが郷土民謡となり、今日まで唄われ踊り続けられている。いっぽう白秋は「茶っ切り節」を書き、これは静岡地方にとどまらず、全国的にヒットした。雨情・晋平コンビで「波浮の港」を作るとこれまた全国的ヒットとなる。

「磯の鶉の鳥や 日暮れにやかえる」とあるが、じつは波浮の港に鶉の鳥は来ない。「波浮の港は夕焼け小焼け」とあっても、波浮の港は東側にあつて、夕焼けは見えない。雨情は船酔いを恐れて、一度も大島には行かなかつたのだ。それでもこの唄のおかげで、大島は空前の観光ブームとなった。新民謡が観光産業と結びついて、本格的な新民謡ブームがやってくる。雨情・晋平コンビで「三朝小唄」を作ると、それまで宿屋が二、三軒しかなかつた三朝温泉（島根県）に、旅館が五〇軒も立ち並ぶ大繁盛となった。

流行歌というものは当たってもその年だけで、たちまち忘れられてしまうのに対し、童謡はずっと唄われる。新民謡も同じで、全国的にはめつたに流行らないが、ご当地ソングとしては子から孫の代まで唄いつがれる。作り手は全国から引っ張り尻となった。作者としても悪い仕事ではない。作詞・作曲・舞踊の三者が招かれると、まず歓迎の嵐を受けて、観光巡りをして、芸者の総揚げとなる。これが取材視察で、二回目は出来た唄を教え込み、踊りを教える。三回目はこの発表会となり、最低でも三回は行く。

人気の西條八十にもこの仕事は当然回ってきた。最初は町田嘉章に頼まれて「甲州小唄」を作った。その後はほとんどが中山晋平とのコンビで、旅から旅に明け暮れ、すべて合わせると二百か所に余る。東京でも盆踊りができるように、という話が出て中山晋平と組んで「東京音頭」を作ると、これが大流行して全国的に歌われ、踊られた。「ヤートナ、ソレ、ヨイヨイヨイ」という調子のよさが大受けしたが、これは晋平がつけたものだった。

どこへ行くにも招待旅行、名所見物、宴会で馳走三昧、土地の芸者の総揚げ、しかもその地のナンバーワンクラスの芸者と懇ろになって、八十はますます遊びに熱が入るのだった。全国各地の芸者と交友しているうちに「ぼくは芸者というものに一種の仕事仲間というような親しみを持つようになった。彼女らにたいし普通座敷へ呼んで遊ぶ人たちよりも、もう少し深みのある理解を持つようになった」と『我愛の記』に書いている。花柳界に働く女たちには、それぞれもろもろの事情があつて、そこで働くようになったので、決して中等以上の家庭に恵まれた女ではない。大半は貧困がそのスタートになっている。そのへんを八十はよく理解して接近したので、彼女らに絶大な人気と信頼を得た。客と芸者という関係を超えて、対等に接したところにその人

気の秘密があった。

中山晋平とふたりで鹿児島に招かれたとき、中山晋平は名妓・喜代治（のちに喜代三と改名）に惚れ込み、その声のよさにも惹かれて東京へ連れてきて“ウグイス芸者”としてレコード会社に売り込み、ついには夫人にしてしまった。八十は女たちとの交流体験を、妻の死後に『女妖記』として著した。しかしながら、いいことばかりでもなかった。『唄の自叙伝』に次のように書いている。

「こうした唄を書きに行つて、きっと味わう厭な思ひは、反対派の新聞の悪罵と、その土地に在住する天狗の詩人俳人歌人の攻撃であつた」

その土地生え抜きの詩人歌人がどこにも居て、よそ者に自分の土地の唄を作られるのが癪なので、うるさく難癖をつけてきた。それらの詩人歌人を「天狗」と書いているところに、八十の憤怒と、いささかの軽蔑が垣間見える。

八十はそうした間にも、純粹詩をはじめ童話・少女小説・評論なども書いて発表し、大学の講義も怠っていない。大学の講義が終わるのを待っていたクルマに乗せられて、レコード会社に行つて打ち合わせとか情報交換などして、花柳界に流れ込むといった毎日。この暮らしを「ジキルとハイドのように」と自ら書いている。

ところで西條八十という名前は本名で、九（苦）がないようにという願いを込めて「八十」と名付けられたという。ペンネームは柳水巴といい、いくつかの作詞をその名で発表している。そのひとつに「ルンペン節」というヒット曲がある。ルンペンとは「ぼろきれ」とか「古着」を意味するドイツ語、現今ならホームレスを意味する。この同じ年（昭和六年）に「サムライ・ニッポン」が大ヒットした。日本の映画界は、何か当たると、次々と類似の映画を作る。「ミス・ニッポン」という映画が当たって「ミス・ニッポン」を作り、これも当たったので正月映画に「サムライ・ニッポン」を企画した。この主題歌の作詞・西條八十、作曲は松平信博、徳山璉が唄って大ヒット、後々まで唄われる。この唄の題名がカタカナである理由がこれで分かる。この映画の主人公・新納鶴千代は、ニイロ鶴千代と読むのがほんとうだったが、そのまま流行してしまった。この唄の二番は

昨日勤王、明日は佐幕  
その日その日の出来ごころ  
どうせおいらは裏切り者よ、  
野暮な大小落し差し

となっている。このころから左翼陣営に対する当局の弾圧が激しさを加え、マルクス・ボーイを気取った若者は皆素知らぬ顔になった。「どうせおいらは裏切り者よ」という歌詞がその気分合っていて、その気持ちを込めて愛唱された。まさに「歌は世につれ、世は歌につれ」である

。翌年の昭和八年に「サムライ・ニッポン」以上のヒット曲が出た。大磯の坂田山で慶応の学生とその愛人が心中して、最後までプラトニックだったことから、大きく報道された。その新聞の見出しが「天国に結ぶ恋」となっていて、ぜひこれを唄にしてほしいとビクターから話があった。あまりに生々しい事件だったので、柳水巴のペンネームを使い、作曲の松平信博もそれに倣って林純平というペンネームを使った。

昭和八年東京に博覧会が開かれ、ハーゲンバックの曲馬団が来朝することになって、その宣伝のために作ったのが「サーカスの唄」だった。このときの作曲が古賀政男で、はじめてのコンビであった。

旅のつばくろ、寂しかないか、  
おれもさみしい、サーカスぐらし、  
とんぼがへりで今年もくれて  
知らぬ他国の花を見た。

古賀はこの歌詞をもらって、思わずうなったという。古賀政男が晩年近くに書いた『自伝わが心の歌』のなかで次のように書く。

「八十さんは、ほんとうに才人である。女心のやるせなさを表現して、これほど心憎い詩を作れる人を知らない。とくに花柳界の女をつかむことにおいては日本一であろう」「八十さんが白秋とちがうのは、白秋のたくまざる才能の詩にたいして、八十さんは大変な技巧派だということである。失礼かもしれないが、ことばの豊富さテクニックのうまさでは天下一品である」

古賀にとって西條八十は最高の作詞者だったということであろう。また面白い観察もしている。

「八十さんは大変なフェミニストである。しかも少々くずれたような女が好きである。うそつきでかんぺきが強く、いいたい放題でどうしようもないあばずれ。だんなの目を盗んではすぐ男をつくるような女、そんな女性が八十さんのお気に入りだといいたい」

## 空には三日月お座敷帰り

二二六事件から盧溝橋事件と続いて、世は移り「ぜいたくは敵だ」から「欲しがりません勝つまでは」という時代へと突き進んでゆく。歌謡曲も軍部の圧力のもとに、軍歌の時代となるけれど、そんな中でも民衆は必ずしも勇ましい歌ばかり好むわけではない。八十は民衆の好みそうな唄を作っては何度も発禁処分を食らった。川口松太郎原作・松竹映画「愛染かつら」の主題歌「旅の夜風」を作った。

花も嵐も踏み越えて  
行くが男の生きる途、  
泣いてくれるな、ほろほろ鳥よ、  
月の比叡を独り行く。

ここで八十は、意味の連絡など無視して「でたらめをやってみた」と書いている。（『唄の自叙伝』）どこがでたらめかという、比叡の近くにほろほろ鳥などいるわけがない。だいいち八十はほろほろ鳥がどんな鳥だか知らなかった。「ほろほろと泣いている」と言いたかっただけなのである。その後ファンの調べで南米にいる七面鳥に似た鳥で、いやな声で泣く鳥と分かった。この作戦は見事に功を奏した。つまり軍部から「この非常時に男がめそめそ泣くとはけしからん」と発禁になるところ「泣いているのはほろほろ鳥です」と言い逃れしたのである。「男柳がなぜ泣くものか」という歌詞をみた軍人は「泣いているのは柳だというのだろうか？」とにやりと笑ったという。粋な軍人も居たのだ。

軍部の言うとおりにしていたら、多くの人が唄ってくれないからヒットもせず、レコードも売れない。この唄は大ヒットとなって、とくに中国戦線で戦っている兵士たちに好まれた。その翌年古賀政男と組んで作った「誰か故郷を思わざる」も大ヒットして、前線の兵士たちによって大いに唄われた。軍歌という勇ましい唄よりも、こうした哀調を帯びた唄のほうが心に沁み、また元気も出るのだ。「花摘む野辺に日は落ちて みんなで肩を組みながら」と唄いながら、兵士たちは故郷を思い、心慰めたのである。

「純情二重奏」「なつかしの歌声」「蘇州夜曲」と、甘い抒情歌を作って大受けしたものの、真珠湾攻撃からアメリカとの全面戦争になると、八十も戦時歌謡を作り、それなりにヒットもしている。「そうだその意気」「若鷺の歌」「同期の桜」…“七つボタンは桜に碇”“貴様と俺とは同期の桜”戦時下どこへ行ってもこの唄声が聞かれたものである。敗色濃厚になってきたころ“出て来いニミッツ、マッカーサー”とみなが唄い、連日連夜の空襲に耐えているうちに、ラジオから「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」という玉音放送が流れた。東京地方は青空がまぶしい酷暑の日、それまでと違って空襲も来ないし、セミの声ばかりが絶え間ない、不思議な午後の時間が流れた。米軍の下駄ばき飛行機が、のんびり飛んでいるのが遠望できた。夕方に驟雨がやってきて「涙雨だ」と大人たちは言い合った。夕闇迫るころ「特攻隊で死んでいった若い人が可哀想だ」と、うちの母は台所で涙を流した。

敗戦後に八十は軍部に協力したとして攻撃の矢面にさらされた。軍部に協力したのは、ほとんどすべての文化人も同じであって、八十をそれほど責めることはできないはずだ。しかし文学者の仕事などほとんどの人は知らないし、文学者自身も自らの履歴から削除して体面を保とうとした。しかし誰でもが唄った流行歌では、隠しようもなかった。「西條八十絞首刑か」という新

聞記事が出て、戦犯として裁かれると皆が思った。「出て来いニミッツ、マッカーサー」がお咎めなしで済むとは思わなかったからだ。八十も覚悟して獄窓の中で歯痛に苦しむのを避けようと、歯医者に通ったりした。しかしMPを乗せたジープは、ついにやって来なかった。

高村光太郎は、戦時の責任を感じて、岩手県花巻の郊外に山籠もりしてしまった。「文学報国会」の会長だった徳富蘇峰は公職追放されて、伊豆に引っ込んだ。音楽界では山田耕筰が責任を追及されたが、八十と同じようにうやむやで終わった。そのとき山田耕筰はいった。

「敗戦になって一番落胆したのは、天皇が責任をとって退任しなかったことだ。天皇が責任をとらないのに、どうして我々が責任をとらなければならないのか」

英国の不沈艦「プリンス・オブ・ウェールズ」を沈めた飛行機乗りが、最期に「花も嵐も踏み越えて 行くが男の生きる途」と唄って飛び立っていった、という話を紹介しつつ次のように書く。

「ぼくは流行歌、軍歌の如き歌謡曲は、もともと芸術品ではないと考えている。だが、芸術品でなくとも、これらには政治、産業などと同じく、百万人、千万人の人間を動かす力があるのだ。そういう点で、男子が一生を賭ける仕事として価値があると信じるのだ」（『私の履歴書』）

ここには珍しく西條八十の生の感情が出ている。戦犯扱いされて、悪意に満ちたことばの数々に、むかつ腹を立てているように行間から感じられる。「ひとりよがりの詩よりは、多くの人に喜びを、慰めを、励ましを与える歌謡の方が、どんなに社会的に意義があるか」知れない、と終戦直後に書かれた『流行歌の作り方』の中で述べている。そもそも『流行歌の作り方』と題する本など、詩人たちは見向きもしないだろう。そのへんを見通したうえで、純粋詩の問題点を分かりやすく書いている。それは説得力があって、まさにその通りだと思えてくる。

敗戦の前に早稲田大学を辞職し、戦後の混乱期にほとんど収入の道を絶たれてしまって、妻の晴子が八十の洋服を売りに歩くといいことで糊口をしのいだりした。しかし敗戦の翌年に「秋の七草色ますころよ 役者なりやこそ旅から旅へ」という「旅役者の唄」で当たりをとり、一息ついた。

自由、民主主義、男女同権、...人々はその解放感に浸り、腹が減ってたまらないいっぽう、娯楽にも飢えていた。こういう時にこそ、もっとも手っ取り早いのは流行歌だ。軍部から解放されて自由になり、作詞作曲の常連たちも勢ぞろいし、歌手はまさに多土済々だった。人は唄を唄って復興にいそしんだ。西條八十も「悲しき竹笛」「三百六十五夜」「恋の曼珠沙華」「青い山脈」「赤い靴のタンゴ」などの不朽の名作を、次々と作ってヒットを飛ばした。

敗戦直後の闇市・新円切り替え・タケノコ生活といった混乱が治まり、経済もしだいに本来の歩みを始めつつあったころに「トンコ節」が作られた。作詞西條八十、作曲古賀政男、唄ったのは久保幸江である。これが温泉街、花柳界はもとより、居酒屋から立ち飲みといったところで、どこでも聞かれるほどの大ヒットとなった。たちまち女性議員、婦人団体から非難の声が上がり、広く良識派全体から攻撃の嵐となった。とくにいけなかったのは「上もゆくゆく下もゆく、上も泣く泣く下でも泣くよ」という歌詞が猥褻だといわれ、ついには放送禁止歌とされ、この歌詞

はその後削除された。すぐ続いて久保幸江の唄で「お酒飲むな酒飲むなのご意見なれど」という「ヤットン節」（野村俊夫作詞・レイモンド服部作曲）が作られ大流行した。これもすぐに放送禁止となったが、一般には大受けした。この現象を戦後の価値観の転倒と混乱に、おやじたちが起こした反乱だったという見方もある。西條八十の作詞を見た古賀政男は「いやこれはうまいなあ」と感心し、レコード会社は売れること間違いなしと見た。彼らプロにはこうした唄が待ち望まれていることが分かっていたのである。

翌年美空ひばりの代表曲の一つとなる「越後獅子の唄」そして抒情歌「山のかなたに」を作り世に送った。「笛に浮かれて逆立ちすれば、山が見えますふるさとの」とは相変わらずうまい作詞だ。この詞では多くの民謡のように、七七七五の定型になっている。よく見ると、七字は三四に分けられ、この詞の場合三四・四三・三四・五という古来からある定型が守られている。「山のかなたにあこがれて、旅の小鳥もとんでゆく」これは典型的な七五調である。西條八十は常にこの定型を守り、ことばに音楽をもたせている。戦後の解放感と、山へのあこがれに心洗われる思いで人々は唄った。ところがその翌年、今度は「ゲイシャ・ワルツ」でまたまた攻撃され放送禁止歌とされた。作曲はもちろん古賀政男、唄ったのは神楽坂はん子、この唄は以後長らく唄われるヒット曲中のヒット曲となった。この題名がカタカナになっているのは、アメリカ人が遊ぶゲイシャを皮肉ったという。

レコード会社の求めに応じて、とはいうものの八十にも意地はあったらしい。これまで何度もバッシングされてきて、そのバッシングする側の底の浅さ、小賢しさ、いやらしさ、正義というものの怖さを見ていた。衆を頼んで、嵩にかかって責めてくると、どうしてもその足元が見えてしまって、反省するどころか反発心がわき起こってくる。それをおどけて見せることによって、からかってみたという気分もあったようだ。

戦後になると花柳界も昔と違い、一般化されてきて特殊な言葉もほとんど死語になりつつあった。八十は普通の言葉で作るのだから、芸者の世界を唄う作詞は誰でもできるはずだといった。しかしレコード会社でいうことが面白い。

「普通の言葉で作っても西條先生が作ると、花柳界の雰囲気になるけれど、ほかの人が作るとキャバレーの雰囲気になってしまう」...これではこうした唄は、西條先生のお家芸としてお願いするし、八十も受けざるを得なかっただろう。

わたしの出身校である世田谷区立経堂小学校の校歌は、在学中はなかったけれど、その後西條八十の作詞・古関裕而の作曲で出来ていることを知った。八十の妻晴子が戦後の早い段階で、世田谷区成城に広大な敷地を有するお屋敷を買って、そこがついの住処となった。「経堂」は同じ小田急線の三つ先の駅という近くにあったので、お願いして作ってもらったのだろう。

八十は校歌・社歌の類を七百以上も作っている。この世界でも飛びぬけて多作である。周辺の学校の校歌も多々あるし、成城署の署歌も作っている。「三越」「松坂屋」「ビクター」「コロムビア」「講談社」「トヨタ」「キヤノン」「森永製菓」「山一証券」「専売公社」「東京税関

」「強羅ホテル」…頼まれればなんでも作った。「巨人軍の歌」もそうだし、明治大学の校歌「白雲なびく駿河台」もじつは西條が作っている。この作詞は児玉花外となっているが、できた歌は奔放自在な自由詩だったので、作曲の山田耕筰は困って、定型詩に改めてほしいと西條に依頼してきた。そこで請われるままに、全体を勝手に書き直して出来上がったのが今の校歌だという。作詞料は一銭も貰っていない。今だからもう告白してもいいだろうと『我愛の記』の中で書いている。

「ゲイシャ・ワルツ」以後歌謡曲の作詞はしだいに減っていった。「娘十九はまだ純情よ」「こんな私じゃなかったに」「この世の花」といかにも八十ならではの唄を作っているが、レコード会社からはしだいに遠ざかっていった。戦後は歌謡曲の作詞も相変わらず大繁盛だったいっぽうで、純粹詩も毎月雑誌に発表し、多作ぶりを発揮している。昭和二五年には年に九〇編以上、月平均八編の詩を文芸誌から一般誌にも発表している。この年多くの詩人たちの協力を得て「日本詩人クラブ」を創立するという大仕事を果たし、その初代会長に、その翌年には初代理事長に選ばれた。イギリスから詩人を招いて講演会を開いたり、新人の発掘に努めたり、その方面でも活躍している。しかしそのへんはほとんど評価されずに忘れ去られてしまっている。この時期流行歌を作っていなかったら、それなりの評価を受けていたであろうし、まして「トンコ節」「ゲイシャ・ワルツ」を作っていなかったら、けっこう評価されていたかもしれない。（つづく）

## 執筆者のプロフィール（五十音順）

---

### 出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

### 北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『榧』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

### 金 得永（きむ どうくよん）

一九五六年大韓民国全羅南道新安郡生まれ。木浦、光州、ソウルで海を故郷に宗教に傾倒しながら育つ。一九七九年、光州教育大学を卒業。一九九一年、日本奈良教育大学大学院修了。一九九五年檀国大学校教育学博士号（日本研究）を取得。二〇〇一～二〇〇四年、日本の岐阜韓国教育院長に派遣勤務し、『古代からの韓日交流の歴史』出版。その後、『日本生涯学習都市フロンティア』、『日本の生涯学習まちづくり論』、『人性千字』、『教師のためのソ-シャルスキル』、『生涯学習まちづくり論』などを韓国で出版。

二〇一五年から日本東京韓国学校の校長として赴任。子供たちが幸せな世の中、教室の中の幸福条件を整備中。目に見えない教育にも力を尽くしている。休日は、日韓古代史を中心とした神社や寺院を巡礼。古代人と、自然との対話を試みている。「ジュリアを讃えて」の詩は日本での処女作である。

### 高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。



日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

### 神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

### 高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。学生時代に同人誌「遡行」を発行。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九六年に個人誌「パープル」創刊（四〇号から電子書籍）、同年「風狂の会」会員になる。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（ブクログのpapier）に、随想集『アランと共に（I・II）』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ（I～V）』『文明国の戦争で真の原因になるもの（上・下）』『神々（上・下）』『神話序説』『家族感情』『わが思索のあと（上・中・下）』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

### なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつぐら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

### 原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）等。現在短編小説集『

永遠の、地上の（仮題）』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齡知命に達した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半にかけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェツシー、ラヴェル、セロニアス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

三浦 逸雄（みうら いつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。二〇一七年三月には京都での作品発表を予定している。

（以上）

## 読者からのコメント（2016年9月現在）

---

—————（9月版）—————

アラン『わが思索のあと』（二十六）再びヘーゲル：アランの、ヘーゲルの講義が好評だったようです。私には、芸術・宗教・哲学・精神哲学などなど、難しい内容でした。

詩人・作詞家・西條八十（一）：『コドモノクニ』は素晴らしい雑誌だとうかがいました。「かなりや」はよく歌われていますね。野口雨情の歌も大好きです。金子みすゞの故郷にも行きました。西條八十の歌謡曲も多いですね。昔の歌はいいですね。西條八十の人をよく教えていただきました。

骨の行方：『石原武全詩集』の「片隅を奪うもの許すまじ」の中から、シェイクスピアの墓碑銘のこと、デカルトの頭蓋が人類博物館に並べられてあること、「されこうべ」から、戦って殺されたうえ飾り物にされた頭蓋のこと、「漢の武帝」の中から、頭蓋が野蛮に扱われたことなど。全く知りえないことを教えていただき、驚き入っています。先日NHKで「彷徨える遺骨」を見て、寒々となりました。

三浦逸雄の世界（十の二）：「午睡」お疲れの様子がよく分かります。

三浦逸雄の世界（十の一）：山羊を引いて広野をゆく人の、後ろ姿に感じ入りました。

浦島：人間世界のように、あまりにも残酷すぎる物語ですね。「生きたい！」と思った5連には共感できました。

哲学の子：哲学の子と呼ばれていた少年の姿が、よく分かります。その子を見守る、周りの温かい人たちにほっとします。今はどうでしょうか。その後青年になって、彼はどうしているのでしょうか。

楽観主義を勧める人へ：世の中は思うようにはならないものですね。最終連にわたしも共感です。力づけられました。

海と語ろう：そんな語らいができたらいいですね。どんなに住みよい世界になるでしょう。

夏：深大寺の森近く。鳥や蝉トンボによって、夏の移り行く光景が見えるようです。

—————（8月版）—————

アラン『わが思索の後』（二十五）：アランはヘーゲル主義者で、いろいろ説明されていますが、すみません。私に哲学は難しく思いました。

小島政二郎『小説芥川龍之介』ほか（二）： 童謡は好きです。幼い頃ご苦労なされたのですね。「心の栄養」は大切と思います。私も道端のいっぽんの草にも感動したいと思います。私は知らないのですけれど、「赤い鳥」や「コドモノクニ」は心の栄養になったと聞いていました。

世の中（四）： 全く知らなかった、評論「文学の現在・所在・創造」や、勝海舟の「氷川清話」や、雲の上の作家さんのことや、文学は祈りであることなど、大切なことを教えていただきました。科学技術が進んで、振り込め詐欺を生み、ポケモンGOにふけています。「亡国のポケモンGO」と言った人がありました。もう少し平和のことなど考えたらと思うこの頃です。

三浦逸雄の世界（九の二）： 椅子から立ち上がって窓の外を見ている、物憂げな後ろ姿が感じられます。

三浦逸雄の世界（九の一）： 美味しい食べ物も飲み物もない、静かな世界を感じました。

鴨川シーワールドのシャチ： シャチのショーが眼に浮かびます。喜んでいる子供たちの姿も・・・ほんとうは、やっぱり海で暮らしたいでしょうね。

神の島、神津島： 神津島ジュリア祭 巡礼 のことを、初めて知りました。海の波のように黙々と生きようと思います。

女郎グモ： 女郎グモと罨にかかった奴との攻防が、美しく描かれていました。それにしても、更に美しくなっていく女郎グモの凄さを感じました。

幸せを知る人へ： 思うようにならないことのほうが多いと思います。旅行や金持ちや成功や楽しみで幸せになれるのではないと思います。命あることに感謝します。

いい人： いい人なのに、どうして別れたのでしょうか。お帰りの声もないドアを開ける虚しさが伝わってきます。

チロ： 愛犬は家族のように可愛いですね。リードを解き放され、自由になったチロの様子を見ながら、人も解かれて旅立ちたい願望もありますけれど・・・

—————（7月版）—————

小島政二郎『小説芥川龍之介』ほか（一）： 芥川龍之介がどうして自殺をしたのかを。そして、永井荷風は文学者として本物だということを知りました。

世の中（三）： 私はこの小説も読んでいません。石原慎太郎氏の選評ということで興味深く拝読して、いろいろな見方があることを知りました。人工知能が発達しても、きっと血の通った人

間には及ばないと思います。

三浦逸雄の世界（八の二）：愛犬との温かい絆が伝わってきました。

三浦逸雄の世界（八の一）：お疲れのように見うけられましたが。深く鑑賞ができなくてすみません。

遥かな人へ：穏やかな翳雲のようなあなた。そんな信じられる遥かな人のところへ向かう姿に、力強さを感じました。

おたあジュリアを讃えて：初めて「おたあジュリア」のことを知りました。神津島のことも。

鴨川の海：静かな深い海の青に呼吸をあわせ、はるかに透けるような空の青にからっぽの心を飛ばす。すてきですね。

山のむこう：三浦逸雄の世界『山のむこう』を拝見して、このような詩に紡げるなんてすごいですね。

てつわんあつとむくんのたいけん：バラ色と思っていたのに、灰色っだって。いつか人間は、間違いに気づいてくれることを、アトムは信じていると思います。

犬：小学生のときの剣道練習の帰り道、犬の轢かれるところに遭遇した体験は、少年の心に深くくいこんだのでしょうか。

目と目が：赤信号の交差点での出来事。消防士さんと消防自動車の好きな少年と、目と目が合った一瞬が生き生きと表現されていて、ほほえましく感じました。（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)

2016年7月～10月版 (第24号～27号・合併号)

<http://p.booklog.jp/book/108105>

編集：風狂の会 (担当：高村昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108105>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108105>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ